Ring-Bong 第７回公演「逢坂～めぐりのめあて～」

登場人物

松田勝太郎…（７５、８０）…日本新聞の初代社長。テレビの導入、原子力発電の導入も手掛けていく。名誉欲が強く、人の手柄も自分のものとしてしまったりするが、妙な愛嬌があり、周りで人々は動いていく。自身が手掛けるプロ野球の試合を、天皇の観覧試合にし、自身のテレビ局に中継させるという野望を果たす。

柴崎敏之…（１６、３４、３９、４８）…松田の影武者の存在であり、テレビ導入、原子力発電の導入に迅速する。英語が堪能で、アメリカとのパイプ役となる。強い反共主義の持ち主。目的のためには、人を切っていく冷淡なところもあるが、女性にはモテる。安田素子、藤本滋とは同級生で学生時代を共に過ごしていた。

藤本滋…（１６、３９）柴崎、淳一、素子と同級生。優秀な野球の投手で、松田によって、日本初のプロ野球選手になる。プロ野球入りし進学しなかったことで、出征では前線に送られ、肩をやられてしまう。シベリア抑留を経て、１９５３年に帰国する。命は無事だったが、野球選手としてはダメになってしまっている。

安田素子…（１６，３４，３９、４８）…女学校の教師。戦後間もなく始まった、学びの場「竹の子会」の教師となる。１９５４年の第五福竜丸事件からの反核運動の署名活動を始めていく。その運動は全国、世界的に広がっていくが、松田、柴崎が先導する「原子力平和利用キャンペーン」に押されていく。

安田修…（４１、４６）…語り部となる。素子の兄。安田家の長男。大衆雑誌「夫婦の生活」の記者。夏子の父親。大の野球好き。１９６８年、「しずめてよいか第五福竜丸」の投書をする。（後、第五福竜丸の保存運動へとなっていく。）

安田夏子…（１６、２１）…修の娘、素子の姪。女学生。ミーハーで、流行にすぐに左右される。

荒木夕子…（３０、３５）…松田の別宅の女中。実は、柴田と恋愛関係にあるが、柴田の仕事にも利用されているようだ。華族の出で、今は没落しているということを公言しているが本当かどうかは定かではない。柴崎に利用されつつも、自身も女を利用して生きていることは自覚している。

藤本麦…（１４）藤本滋の娘。素子の勤める女学校の生徒。

１９３７年、１９５４年、１９５９年、１９６８年、の荻窪、本郷。

舞台には、立派な大きな机。
その空間が、松田の居間になったり、安田家の部屋になったりする。違うのは、松田家にはテレビがあり、窓からは、後楽園球場が見える。時に、車の中、坂の上、坂の下で、物語は進む。

プロローグ
藤本滋が、白球を持っている。大きく振りかぶって投げると同時に大歓声。明かりが変わっていく。

１－１場
昭和２９年９月２２日　車の中
松田。カーラジオからは、ニュース。代用マグロの献立について。

柴崎　お待たせしました。
松田　遅い。
柴崎　は。
松田　待つのは嫌いなんだ。知っているだろう？（ラジオを切る）
柴崎　しかし、松田さん。本郷に行かれるときは…。
松田　分かっている。

柴崎が乗ってきてアクセルを踏む。少し間

柴崎　久保田愛吉さん、意識は戻ったそうですよ。焼津から家族が駆けつけましたからね。「家族の愛が久保田さんの意識を戻す」って、お涙頂戴もので流れるんじゃないですか？
松田　この間のラジオもやりすぎだろう。
柴崎　ああ。娘さんと久保田さんの電話の中継ですね。
松田　ああいうのはやっかいなんだ。上の子が…
柴崎　９歳、７歳、３歳の三姉妹ですね。
松田　そうだ。可愛い声で「お父ちゃん」とか流れたら…なあ。
柴崎　お聞きになっていたんですか？
松田　（ちょっと笑っている）
柴崎　病院も、ぶんやとテレビが張り付いてますよ。とにかく取り上げれば数字が取れますからね。

松田　原子マグロに死の雨。…大げさだ。
柴崎　市民が一番敏感なところにつけこんで、独立党の奴らが先導しているのがどうも…。ひと月で、２６万も署名を集めたらしいです。
松田　わざわざ水爆実験の近くで漁とはなあ。
柴崎　９０マイルは離れていたそうですが…。
松田　それだけの威力ということか？
柴崎　ええ。水爆は広島長崎の２５００倍の威力、「大河をも沸かす力」ですからね。
松田　お。「ついに太陽を」の見出しだな。
柴崎　ええ。しかし、論調がなまぬるくはありませんか？こんな事件も起こってしまった今、わが日本新聞としては…
松田　いや、いいんだ。あまり分かりやすくしすぎても信ぴょう性がないだろう。日本新聞では慎重に、新日本テレビで、分かりやすくやればいいんだ。びっくりさせて、分かりやすくな。
柴崎　新しいですね。新聞とテレビで切り口を変える…。
松田　日本で初めてじゃないか？
柴崎　ええ。まだどこも。松田さんのように、新聞とテレビを束ねている人間なんていませんからね。
松田　うむ。そうだな。今聞いてたラジオも、マグロの代用献立についてだ。主婦層を狙ってのことだろう。
柴崎　今度、局でアイソトープが若返りと美容に効果があると特集を組みますよ。
松田　ああ。それがいい。放射能は怖いだけじゃないってことを大々的にな。
柴崎　新聞の連載では、石油は将来的に枯渇することを強めに出します。
松田　ああ。…「すし初」に寄るか。
柴崎　いいですね。
松田　酒が入ったほうが頭も回るかもしれん。
柴崎　そうですよ。酒の席で出たアイディアは、今までだって…。でも、店から歩いて帰らないでくださいよ。家まで、車でお送りします。
松田　いいだろう。すぐ近所なんだ。
柴崎　そういう油断が命取りですから。
松田　うむ。…しかし、マグロが食えないのは痛いなあ。あの店はさ、トロとワサビのバランスが絶妙なんだよ。食いすぎたかなと思っても、もたれない
柴崎　今日は入っているといいんですが。
松田　大間のマグロはたまらないからなあ。
柴崎　からし醤油でのズケもいけますよね
松田　何を言うんだ。わさびだろう。マグロは。
柴崎　赤身のうまさも格別でしょう。

松田　若いのに何だ。
柴崎　トロもうまいですよ。うまいですけども、赤身の漬けも…

外から、後楽園球場の歓声

松田　始まったところか。
柴崎　そうですね。
松田　これ以上負けられないからな。
柴崎　今年の中京ドラゴンズは手ごわいですからね。
松田　枚下だ、枚下。
柴崎　あれくらいのスターが日本レンジャーズにもほしいところですね。
松田　藤本滋がいれば、なあ。
柴崎　…ええ。
松田　会ってるのか？
柴崎　…いえ。
松田　そうか。…まあ、無事にシベリアから帰ってこられたんだ。まずは、よかった。
柴崎　…ええ。
松田　我が日本レンジャーズの宝だからね、藤本滋は。いや、日本野球界の宝と言ってもいい。彼の復活をファンは待ち望んでいるだろう。
柴崎　ええ。

柴崎、ブレーキを踏む。往来の雑踏から、反核運動の署名を求める声が聞こえてくる。
声の主は素子と夏子たちのようである。

松田　あそこに、いつもいるなあ。
柴崎　後楽園球場がありますし、人が多いのを狙っているんじゃありませんか？
松田　君は、あれをどう思う？
柴崎　大和撫子が絶滅寸前ですね。
松田　（笑う）
柴崎　…所詮、食い物の恨みなんですよ。それをアカのやつらが利用している。（アクセルを踏む）
松田　好きだからな、日本人は。マグロ。
柴崎　さっきの署名運動も、旗が立ってましたね。
松田　そうだったかな。
柴崎　ええ。一般の女性教師が、代表に担ぎ出されたんです。女性の社会進出を歌いあげればイメージがいい。よく考えましたよ。

松田　新宿での「だれにでも分かる原子力展」は好評だったろう?来年の春には、もっと大々的に平和利用の展示を行う。今まで見たことが無いような…目玉がほしいな…。

柴崎　空前絶後のですか？

松田　そうそう。あっと驚くような…。自宅に置ける原子力発電って言うのはどうだ？そうだ！小型の動力炉をアメリカから取り寄せられないか？

柴崎　自宅に動力炉ですか？

松田　そうだ。日本人は核アレルギーだからね。自宅にも置けるとなれば、大分イメージが変わるだろう。うん。いいな。これでいこう。

柴崎　アメリカに頭を下げるのはこの僕ですよ。

松田　そこはうまい事やってくれ。テレビの時みたいにやってくれればいいんだ。よし！寿司だ。

柴崎　ほどほどになさってくださいよ。

松田　年寄り扱いするな。

柴崎　…ほどが過ぎれば胃がもたれる…

松田　そうだよ。そこでわさびなんだよ。大トロにワサビ。これが最高だ。

柴崎、ブレーキを踏む。

松田　なんだ?どうした?

柴崎　うまいマグロも、ほどが過ぎれば身体に悪い。素晴らしい核のパワーも危険を伴う。マグロにわさびをつけるように、「核」には「平和」をつけるんです。

松田　…うむ。

柴崎　松田さん。核アレルギーには、核そのものをぶつけるんです。「核」によって「平和」は守られる。毒を持って毒を制すって言うでしょう?ですから…

松田　毒には毒を…。核には核をか。

柴崎　ええ。

明かりが変わっていく

１－２場

「これが自由というものか」を、歌いながら修が現れる。

修　エノケンが歌ってました。知ってます?エノケン。時は、昭和２９年。この年３月に第五福竜丸がアメリカの水爆実験によって被爆します。「日本に放射能の雨が降る！」「被爆マグロは食えない！」と、日本中は大騒ぎ。さっきの…ツルっとして

る方が、松田勝太郎。大手メディアの日本新聞、新日本テレビの社長を務めて居ます。日本で初めてが大好きな人でして、日本初のプロ野球を作り、日本初のテレビ放映をし、日本初の原子力発電所を作ろうとしています。もう一人は、柴崎敏之。彼は、松田の腹心の部下…、右腕…。松田のテレビ局は、毎日午後２時に御前会議と呼ばれる重役の会議があるんですが、柴崎は絶対に出席。日本新聞社でもテレビ局でも唯一個室を持っているご身分。ただ、一切名前を出さない。あくまでも松田の…黒子に徹している男です。昔は、可愛かったんですよ。隣に住んでいたんです。毎日のように、妹と一緒に遊んでいたんですがね…。さて、所は荻窪の我が家です。

１－３場

荻窪　同じ日　安田宅

ハリウッド映画のイメージの曲が流れ、スライドして豆腐屋のラッパの音。
夏子がセーラー服のスカーフを頭に巻き、ヘップバーンになり切りながら、アイスクリームのようなものを食べたりしている。

夏子　㋜「あなたに白状することがあるの。昨夜学校から逃げてきたの。１，２時間のつもりが眠り薬を飲んでいたので。何でも気が向くままにしたいの。」Ⓖ「髪を切るようなこと？」㋜「楽しみたいの。冒険も少しは」

茶箪笥に向かい、引きだしを開けて

夏子　Ⓖ「真実の口だ。嘘をつくとかまれるという噂がある」㋜「怖いのね」Ⓖ「やってごらん」

引き出しに手を入れる。

夏子　㋜「あなたも」

グレゴリーが引き出しに手を入れるのを見守る感じ。自分で引きだしをバンっと閉めて悲鳴を上げてみる。と、豆腐屋のラッパの音。

夏子　邪魔だよ、もう。（だが、続行する。）㋜「私が、王女としての義務をわきまえていなかったら、今晩戻ってこなかったでしょう。」（移動して、優雅に腰を掛ける）㋜「どの町にもそれぞれにいいところがあり…ローマ。ローマです。私はこの町の思い出を生涯…

素子　なっちゃん、今日は何人だった？（声）

夏子　（慌てて大声で）今日は多かった！３０００万人まであと一歩だー
素子　まだ数えてないの？（声）
夏子　多すぎて数えてない！多かったから！すごく！

素子

素子　なっちゃん、お豆腐知らない？
夏子　お豆腐？どうだったかなあ…
素子　（夏子の頭を見て）なっちゃん、掃除してるの？
夏子　違う！素子おばさん、酷い！ヘップバーン。これは、ヘップバーン。
素子　ええ？
夏子　だから、オードリー・ヘップバーンだってば。
素子　ああ！
夏子　それも嘘くさい。
素子　…あー。
夏子　ねえ。なんか、カッコよくできないかなあ。
素子　え？
夏子　もう少しさー、通りすがりの人がデモに参加してもいいかなあって思うようなかっこいいことをしたほうがよくない？
素子　でも、足を止めて署名をしてくださる方だっているでしょう？
夏子　そうかもしれないけど。でもさ、半分は私達を無視していくでしょ？
素子　まあ、そうね。
夏子　チラシ配ってると、汚い物みたいに見られる時があるじゃん。結構傷つくんだよね。

そこへ、修。

修　なんだ、夏子、そうじか？
夏子　違う！お父さんまで酷い！ヘップバーンだってば。
修　オードリー・ヘップバーン！（指をさして大声で笑う）
夏子　失礼すぎる！何で笑うのよー。
修　（無視）負けちゃったよ。５対４、中京ドラゴンズにまたやられた。
素子　何？さぼってたの？
修　いやいや、みんな見てるよ。街頭テレビ。すごい人だよ。
夏子　締め切りが明日って言ってたじゃない？
修　大丈夫だ。うちの雑誌は、優秀な記者がそろってる。その才を活かせているかと

言えば微妙なところだがな。

と、テーブルの上に置かれた何かを食べる。

修　なんだこりゃ。豆腐か？
夏子　そう。
素子　あ！お豆腐！
修　豆腐は箸で食え
夏子　アイスクリームよ。ヘップバーンが食べてたでしょ？ああいうのどこにも売ってないんだもん
素子　今日の夕飯…
修　そんなもん、赤毛が食う食いもんだ。お前みたいなモンゴリアンが食うもんじゃない
夏子　ちょっとー。
修　今日も行ってたのか？署名活動。
夏子　そうよ。３０００万人まで、あと一歩！
素子　なっちゃんみたいな若い子がいるとね、足を止めてくれる方が多いのよ。
夏子　結構褒められるよ、私。
修　大丈夫なのか？なんだかんだいって通っちまっただろ？教育二法。
夏子　なにそれ。
修　６月だっけ。国会で大乱闘があっただろ？
夏子　あー。あれすごかったよね。机の上にも、人が乗っちゃってたんでしょ？ラジオで聞いてたら、プロレスかと思ったよ。大人げないよね、国会議員のやることじゃないよ。
素子　まあねえ。
夏子　やっぱり野党はダメなんだってみんな言ってるよ。
修　その乱闘の原因は、ＭＳＡに秘密保護法に教育二法、無理やり通そうとしたからだろう？
素子　乱闘のことばかりが話題になっちゃってるものね。
夏子　で、教育二法ってなに？
修　中立性を守るため、教師のデモ参加を禁止、とかそういうやつだ。
夏子　素子おばちゃん、つかまっちゃうじゃん。
素子　大丈夫よ。悪いことなんてしてないもの。
夏子　つかまっても応援するからね。
修　悪いことをしてなくても捕まっちゃうような世の中にしないために頑張るんだろ？俺たち、市民は。

素子　じゃあ、署名…
修　素子は素子。俺は俺のやり方があるからな。
夏子　暑苦しいよ、お父さん。
修　そうか？（シャツの匂いを嗅ぐ）
夏子　そっちじゃないよ。
修　限界だな。夏子、洗っておいてくれよ。

修、シャツを嗅いでその場で脱ぐ。

夏子　えええ？
修　だって限界だろ？ほら。（匂いを嗅がせようとする）
夏子　やめてよ、乙女の前で！！
修　ほら。（素子にも）
素子　…（嗅いでみたら臭かったらしい）
夏子　なんで嗅ぐのよ。どう考えてもくさいでしょ。
素子　怖いもの見たさと言うか。
修　おい。
夏子　ねえ、お父さん、洗濯機買ってよ。今度、絞り機つきが出たんだって。知ってる？
素子　あれ、便利そうよねえ。シーツとかタオルは絞るの大変だもの。
夏子　ね？でしょ？洗濯機でスイッチ押したら、その間は自由時間なのよ。すごくない？
素子　いいわよねえ。
夏子　いつもなら洗濯に費やされる時間に、読書ができる。知的な女性も増えていくってところよ。
修　お前が読むのは「少女ブック」とか、そんなもんだろう？
夏子　うるさいなあ。
素子　でも便利よ。冬なんて寒いし、手もあかぎれするし。
夏子　そうよ！白魚のような手が台無しだわ。
修　便利だろう。それは認めるが、我が家にはまだない。な？
夏子　（大きなため息）

夏子が、しぶしぶ修のシャツをつまんで持っていく。

修　なんだ、汚いものみたいに！…なあ。シャツ…
素子　そのくらい自分で取ってきなさいよ。
修　優しくないなあ。

修も、しぶしぶ箪笥にシャツを取りにいく

修　（声）夏子！ついでに、これも。
夏子　（声）えええええ？
修　（声）ついでだよついで。
夏子　（声）じゃあ、ジュース買ってきてよ。どうせ銭湯でしょ？

修戻ってくる。洗面器と手ぬぐいも持ってきている

素子　銭湯？
修　ああ。ひとっ風呂浴びてから夕飯にするかな。

夏子（ゴム手袋をはめたまま）

夏子　ねえ、変だよね。
素子　何が？
夏子　このズボンにこのシャツは変だよね。
素子　ああ…（よくわからない）
修　いいだろう？銭湯に行くだけなんだから。
夏子　止めてよ本当。カッコ悪いよ。素子おばさんもさ、止めてよ。このセンスのなさを。
素子　うーん…
夏子　あ。ダメだ。兄妹そろってダメなんだ。
修　お前なあ…
夏子　カッコいいのがいいんだって、服だって、デモだって。ね？
素子　…うーん…。
修　じゃあ、何着ればいいんだよ。
夏子　そんなの自分で考えなさいよ。
修　（脱ごうとする）
夏子　止めてよ！洗濯物が増える！！
修　だったら言うなよ。
夏子　だってカッコ悪いんだもん。
修　黙って見守るとかしろよ。
夏子　なにそれ。

夏子、去る

修　そんなに変か？
素子　うーん…。
修　素子に聞くのが間違いだったな。
素子　失礼な。
修　あれだけ文句言うんだったら、番号とかふってくれたらいいんだよ。
素子　どういうこと？
修　シャツとズボンに1番って書いてあれば、それを組み合わせて着れば文句言われないだろ？面倒なんだよ。考えるの。
素子　（笑って）残念だったわね。日本レンジャーズ。
修　（声）7回までは、リードしてたんだよ。なのに、逆転されちゃうんだから。ピッチャーがいないんだよ、ピッチャーが。あっちは、枕下がいるからなあ。中京ドラゴンズに枕下みたいな、チームの大黒柱がほしいよなあ。
素子　滋君が投げてればねえ
修　そろそろ一年だろ？シベリアから帰ってから。もう登板してもいいよなあ。
素子　そうねえ。
修　会わないのか？
素子　大スターよ。滋君。試合に出たら、応援に行くわよ。
修　しかし、今なら…。来てほしいんじゃないか？向こうだって。
素子　滋君にも所帯があるんだし。
修　そういうものかな
素子　ええ
修　戦争中は球団も必死だったよな。手榴弾投げをパフォーマンスでやらせるは、シーズン終わったらすぐに工場で武器を作らせるは…。そうはいっても、赤紙には逆らえない。佐和村とかさ、いい選手がずいぶんと戦死しちまったな…。
素子　身体を壊してやしないかしら？
修　シベリアだからな。相当こき使われたって話だ。
素子　…

夏子がゴム手をはめたまま再び登場

修　なんだふらふらと。
夏子　ねえ。私もさ、お見舞いに行ってもいい？
修　お見舞い？

素子　第五福竜丸の皆さんのお見舞いに行こうって。直接には難しくても、お見舞いの品とお手紙だけでも…。
修　ああ。
素子　でも、なっちゃん。学校は？
夏子　そこは特例で。
修　さぼりたいだけだったら駄目だぞ。
夏子　違うよ、失礼な。
修　久保田さんの本物が見たいとか、そういうのもダメだぞ。
夏子　違うってば。
修　二人で行くのか？
素子　いえ。竹の子会のみんなで。
修　そこに夏子もか？
夏子　そう。勉強会に何回か行ってるし。
素子　なっちゃん、結構いい意見を言ってくれたりしてね。メンバーになってほしいって話してるのよ。
夏子　堅苦しいのかなあと思ったら、意外におやつ食べながらで、和やかでさ。割とよかったよ。
修　「竹の子会」は、もう何年だ？
素子　もうすぐ6年。
修　よく続いてるよ、本当に。
夏子　お孫さんと一緒に来てるおばあちゃんもいるよね。
素子　大竹さん。
夏子　あ、そうそう。戦争で勉強できてないからって言ってる人も多いよ。
素子　そうね。
夏子　いつも素子おばさんが授業してるんでしょ？
素子　私がって言うよりは、みんなでだったでしょう？読書会をして、わからないところを話し合って。
修　「荻窪アピール」もか？
夏子　おやつ食べてた時に思いついたんでしょ？
素子　ええ。みんなの考えを私がまとめて。
夏子　「水爆禁止のために全国民が署名しましょう。」「世界各国の政府と国民に訴えましょう」「人類の生命と幸福を守りましょう」
素子　あらすごい。覚えてる。
夏子　若いから。
修　よく考えたよ。政党色が無いし、訴えがシンプルだ。賛同しやすいよな。
素子　社会運動って言うと、派閥ができてしまうでしょう？でも、そんな場合じゃない。

「核」は人類全体の問題だもの。本当に求めている未来の図を見失っちゃいけないと思うの。

夏子　でもさ、みんなが真面目すぎるんだよね。どうでもいいでしょっていう細かいことでよくケンカしてるじゃん。あれよくないよ。

素子　そうねえ…

修　夏子。洗濯は？

夏子　えー？いいとこなのに。

と、言いながらも去る

修　分からんけどさ、きっと、アメリカ以外の国も水爆を持つようになると思うんだ。

素子　そう思う？

修　ソ連も…持つだろうな。大国と呼ばれる国は、次々に持つんじゃないか？

素子　無くならないのかしら、核は。

修　思想、民族、宗教…。この対立が無くならない限り無理だろうな。

素子　思想の対立…

修　資本主義って言うのは、乱暴に言えば弱肉強食だ。手に入れた強いものは、手放さないだろうなあ。

素子　より強くなるため…

修　そうだな。資本主義のなれの果てが…核になるのか。

夏子　お父さん！やっぱり洗濯機！（声）

２－１場

これが自由というものか、が流れている

修　（洗面器を持ち、タオルを下げたまま）夏子が女学校に入ったばかりの頃、素子が熱心に教えていたのが「あたらしい憲法のはなし」。どこの学校でも使われていました。基本的人権、国民主権、戦争放棄…。分かりやすく書かれています。しかし、戦後９年で再軍備が始まりました。全国の教師たちは「教え子を戦場に送るな」と反対声明を出します。素子も、その一人。それを偏向…偏った教師だと白い目を向ける人もいるわけでして…。さて、翌日。昭和２９年９月２３日です。日本レンジャーズは５連敗。８月終わりから、中京ドラゴンズに首位を明け渡しちまってます。俺たち日本レンジャーズファンは、逆転を願って球場に思いを馳せるわけですが…。水道橋駅から本郷へ向かう坂を上ると、後楽園球場がよく見えるんですよ。その坂の上、松田の別宅を覗いてみましょうか。

2-2場

松田の別宅　9月23日

テレビからは野球中継が聞こえ、テレビを見ながらコーヒーを入れている夕子。笑い声が奥の部屋から聞こえ、柴崎が現れる。溜息をつきながら現れる柴崎。

夕子　お疲れ様。

柴崎　ああ。

夕子　今日もご機嫌ね。奥の君は。

柴崎　会って初めの30分は黙って笑顔で愚痴を聞く。決して意見は挟まない。そこから、小さなことでもなんでも褒めあげる。今日のお召し物はいい。季節に会っている。さすがのセンスだ。

夕子　やっぱりあんたが相手したほうが機嫌がいいのよ、奥の君は。

柴崎　世間に知られたら大変なことになるぜ。松田に妾がいるだなんてな。

夕子　自分の新聞で特ダネにしたら？

柴崎　松田をつぶして下剋上か？それには興味がないよ。

夕子　面白いと思うけど。

柴崎　（夕子を後ろから抱きしめて）疲れたよ。

夕子　休んだら？少しは。

柴崎　休んでる。今。

夕子　まあ、そうね（少し笑う）

柴崎　ここと違って、本宅に行くとシーンとしてるぜ。顔が映るんじゃないかってくらいに磨き上げられた廊下を、奥様自ら滑るように歩いてきて出迎えてくださる。

夕子　あんた、疲れるといつもそれ言うわよね。

柴崎　完璧だよ。

奥の部屋から音がする。二人は、パッと離れる。

柴崎　…あの方のお出迎えは、いい気分だぜ。家はチリ一つ落ちてやしないし、髪一本乱れていらっしゃらない。

夕子　なのに、松田はここによく来るのよね。

柴崎　ま、本宅は完璧すぎるんだろうな。

夕子　わがままよね。男って生き物は。

柴崎　本宅と別宅で、バランスを取っているんだろ？

柴崎、急に夕子をじっと見る

夕子　なによ。
柴崎　自分のこと喋らないよな。
夕子　話してるじゃない。三人姉妹の末っ子。海軍大将のお父さんは、戦死。お母さんは後を追って亡くなった。お姉さんたちには空襲で生き分かれて会えてないわ。だから感謝してるのよ。ここでの仕事を紹介してもらって。そうでなけりゃ…どうなってたかしら。
柴崎　案外普通に嫁に行ってたかもしれないぜ。
夕子　世の中そんなに甘くはないわよ。
柴崎　まあな。
夕子　あんたは？結婚しないわけ？
柴崎　興味がない。
夕子　あんたが興味があるのは仕事だけじゃない。女だってね、仕事をはかどらせるために必要だくらいに思ってるんでしょ？
柴崎　なんだよ、今日は厳しいな。
夕子　思い出したの。大変だったもの。奥の君のお相手は。
柴崎　ああ。
夕子　ここに勤めたら会いやすくなるとか言っておきながら、勤めた早々、あんた半年もアメリカに行っちまったじゃない。
柴崎　あれは…しょうがなかったんだよ。
夕子　それに、仕事が終わったって、絶対付き合いで明け方まで飲んでるものね。
柴崎　飲むのだって仕事のうちだ。酒の席で決まる取引だって多いんだぜ。
夕子　まあ、それはね。
柴崎　とにかく派手に接待しろってさ。それが命令なんだから。
夕子　派手な接待って言ってるわりに、当の本人はずっと地味なままよね。手下のあんたのほうが、よっぽど派手に暮らしてるじゃないの。
柴崎　松田は起きた瞬間から仕事のことしか頭にない。地味に暮らすのは、大衆の視点を忘れないようにするためだ。今、大衆が何に関心があるかをいつでも調べてる。大衆を熱狂させ、熱狂の立役者になること、それがあの人の執着なんじゃないか？
夕子　松田って褒められるのが大好きだものね。
柴崎　そうだな。
夕子　でもさ、派手じゃないって言ったって、お金持ちでしょう？プロ野球界の父だ、テレビ局の父だってちやほやもされるでしょう？地位も名誉もお金もあって、そのうえまだ褒められたいのかしらねえ。
柴崎　（にやにやしている）
夕子　テレビの開設だって、あんたがアメリカに乗り込んでいって一人で決めてきた

ようなもんなのに、松田一人の手柄になっちゃってるじゃない？それでいいの？

柴崎　表に立つと、余計な責任が生まれる。やりたいことをスムーズに進めるには、表に出ないほうがいいんだ

夕子　（ふっと笑う）

柴崎　なんだよ

夕子　まあ、余計な責任は嫌よねえ

柴崎　なんだよ

と、柴崎が夕子を引き寄せようとすると

夕子　２１時５分前、もうお帰りになるわ。時間には正確なんだから

玄関から犬の吠え声。「やめなさい！」と松田の声もする。

松田

夕子　旦那様。お帰りなさいませ。

柴崎　また吠えられましたね。

松田　だからもっとかわいらしい犬にしろと言ったんだ。

夕子　お腹がすいているのかもしれませんわ。ボギーはお腹がすくと不機嫌になりますから。

松田　ああ。

柴崎　わざわざアメリカから取り寄せたんですよ。利口な犬だからって。

松田　利口だったら、この家の主人の顔くらい覚えろと言うんだ。

夕子がコーヒーを出す。すると、松田はそんなに入れるんですか？というくらいに砂糖を入れて飲む。

松田　うん、美味しい。君の入れるコーヒーは熱さも濃さもちょうどいいね。

夕子　ありがとうございます。旦那様のお帰りが正確ですから、それに合わせて準備ができますの。

松田　やはり電車がいいね。第一、正確だ。待たされたり遅れたりがほとんどない。

柴崎　駅から歩いていらしたんですか？

松田　ああ

柴崎　（溜息）

テレビから野球の歓声。

松田　ああ。見ていたんだね。日本レンジャーズの試合。

夕子　ええ。後楽園球場での試合が、部屋にいたまま見られるだなんてすごいと思いますわ。

松田　後楽園球場の客だけでは4万人に満たないが、テレビで中継することで1億人に届けられるんだよ。

夕子　まあ、一億人！

松田　あれはどうだい？新番組のエノケンの…

夕子　水戸黄門放浪記！あの番組は楽しいですわ。楽しくて夢中で見ているうちに悲しいことを忘れさせてくれますわ。

松田　そうか。君はもともと華族の出だったというのにね…。

夕子　ええ。でも、昔の話ですわ。今は、女中の身ですけれど、こうやって旦那様の家で、安心して眠ってご飯も食べられて…幸せだと思っていますわ。

松田　そうか。妹たちはどうしているんだい？

夕子　仕送りができていますから、やっと上の妹は高校まで卒業できましたの。父も戦死して、母も後を追いましたから…。下の妹たちの面倒は私が見ないと…。

松田　そうか。（涙ぐんでいる）

電話の音

柴崎　（夕子を制しつつ）僕が出ましょう。

柴崎、電話のある隣の部屋へ

夕子　戦争がなければ、父も死ぬことはありませんでしたし、母も…。そう思わない日はないんですけれど、けれど、私だけじゃありませんから。家族を失くしたのは私だけじゃ…。

松田　戦争は終わった。戦争には負けたが、日本人は優秀な民族だ。経済で、文化で…世界一になる。優秀な民族だと知らしめないといかん。日本は…これから豊かにならないといかん。

柴崎

松田　どうした？

柴崎　久保田愛吉さんが亡くなったそうです。

松田　明日の一面の差し替えは…
柴崎　ええ。今指示出ししました。
松田　間に合うのか？
柴崎　ある程度の紙面準備はしてありましたから。
松田　うむ。…早急にキャンペーンを張れ。反核反米の勢いは強大になるぞ

松田は電話を掛けに足早に出ていく。

夕子　困ったことになったの？
柴崎　ああ。進めてきていた原子力発電の導入も遅れてしまうかもしれない。
夕子　そう。
柴崎　なあ。
夕子　なに？
柴崎　きみは、３人姉妹の末っ子じゃなかったのか？
夕子　よりかわいそうに聞こえる話のほうがいいじゃない？同情から、人は行動する。そう言ってたでしょ？

夕子は去る。柴崎が一人残り、背広を着て準備しようとするが、タバコに火をつける。間。テレビでは野球中継が終わるところらしい。

柴崎　…野球…か…。

３場

柴崎に野球のボールが投げられる。「え？」とあたりを見渡すと、学生時代の滋の姿。

柴崎　…滋？
滋　なんだよ柴崎。ぼおっとしてさ。
柴崎　…え？
滋　また、坂の途中で鐘が鳴っちまうぞ。
柴崎　…
滋　鐘が鳴ったら、今日は置いていくからな。
柴崎　…ああ。
滋　俺、決めたよ。松田さんの日本レンジャースに入団する。
柴崎　…そうか。
滋　ああ。
柴崎　お前の母ちゃん、大学野球でいいって言ってたぞ。

滋　学校は出ておけ、そんな水商売みたいな世界に入るだなんて許さない！って。
柴崎　（笑う）
滋　笑うやつがあるか
柴崎　いや、似ていたからさ。
滋　そいつはどうだか。
柴崎　滋はどうなんだよ。やるのか？職業野球。
滋　…試してみたい。俺の力がどこまで通用するのか。
柴崎　そうか。
滋　松田さんが直々に家に来たんだ。父ちゃんも母ちゃんも、腰抜かしちまってさ。…俺が日本レンジャーズに入れば、父ちゃんの借金、全部松田さんが代わりに払ってくれるっていうんだ。
柴崎　すごいな。
滋　「プロ野球を日本に根付かせるには、君のような若い力が必要なんだ」って言われて…。
柴崎　松田さんって、そんなに金持ちなのか？
滋　見た目じゃ分からん。家にも歩いてきたしさ。
柴崎　車じゃないのか？
滋　ああ。雪の日だったんだよ。それなのに…
柴崎　そうか…。よっぽど、滋に期待してるんだな。
滋　…ああ。…この坂の上の大きな家は、松田さんの持ち物らしい。
柴崎　あれ？素子の女学校の隣か？
滋　ああ。後楽園球場がよく見えるように買ったんだそうだ。「日本初のプロ野球」のための球場だ。
柴崎　まり投げなんかに大金使って…ってお前の母ちゃんは言ってるけどな。
滋　日本の野球はアマチュアリズムから抜け出さないとだめなんだ。
柴崎　あそこで…投げるんだな。
滋　ああ。

そこへ、同じく学生時代の素子が走ってくる。

素子　滋君、これ。柴崎君、これ。

と、ふたりにそれぞれ忘れ物を渡す

滋　どうしたんだよ。
素子　忘れ物。

滋　ああ。ありがとう。
素子　私は、二人のお母さんではないのよ。
柴崎　母ちゃん並みに息切れしてるけどな。
素子　うるさいわよ。
滋　いいのか？一緒に歩いていて。
素子　構わないわよ。悪いことなんてしていないもの。
柴崎　俺はもっと恥じらってくれるような女性と歩きたいがな。
素子　嫌な人！
滋　素子。こっちが柴崎のだよ。
柴崎　そうだよな。
素子　あら？
柴崎　素子、ちゃんと確認しろよ
素子　自分たちで確認なさいよ。せっかく持ってきてあげたのに。
柴崎　眼鏡、買い替えろよ
素子　そんなお金、どこにあるのよ。
滋　眼鏡って高いのか？
素子　ええ。
柴崎　お前、夜遅くまでずっと本なんか読んでるからいけないんだ
素子　何？覗き見？いやらしい
柴崎　素子なんか覗いても面白くもなんともない
素子　本当、嫌な人！
滋　夜遅くって何時くらいまで？
素子　２時…かしら。
滋　俺、１０時過ぎたら寝てるからなあ。
素子　滋君は、早起きだもの。朝早くから素振りしてるでしょ？
滋　ああ。
柴崎　滋、日本レンジャーズに入団するんだぜ。
素子　そうなの？
滋　ああ。
素子　すごい！絶対応援に行くわ。
滋　ありがとう。
素子　ね？柴崎君も一緒に行くでしょ？
柴崎　俺は一人で行くよ。
素子　どうして？
柴崎　素子はいきなり泣き出すし、修さんは椅子の上に立ち上がって叫びだすし、俺、知らない人の振りしたかったよ。

滋　前の大会の時か？
柴崎　ああ。
滋　学生とプロじゃ全然違うと思うんだ。
素子　何が違うの？
滋　プロと名のつく以上、それにふさわしいプレーをしなくちゃいけないと思う。それに、プロ野球自体、松田さんが作ったようなものなんだ。日本の野球の未来のためにって。
素子　じゃあ、あの球場も？
滋　そうだね。日本の野球の数々の歴史を刻むことになる。って松田さんは言っていた。自分がどれだけ通用できるのかわからないけど…。精一杯やるよ。
素子　ええ！大丈夫よ。
柴崎　大丈夫って…
素子　だって。未来を担う剛速球なんでしょ？
滋　修さんが記事で書いてくれていたね。

滋、ボールを上に投げて、取る。

柴崎　あんなに大きな球場を作っちまうなんてな。自分の球場に、自分の野球チームか…
滋　すごいよな。
素子　今のうちに滋君のサインをもらっておこうかしら。
柴崎　俺が書いてやるよ。
素子　いらないわよ、柴崎君のなんか。
滋　素子は、どうするんだ？卒業したら。
素子　家は父もいないでしょ？修兄さんが、面倒見るって言ってるけれど…。あ！２５日よ。忘れないでね。
柴崎　修さんが結婚とはなあ。
素子　そうなの。だから、なおさら迷惑かけられないでしょ？教師になって働くつもり。
滋　素子の女学校で？
素子　そうね。そうしたら、学校からも応援できるわ。球場がよく見えると思うの。
滋　そうか。
素子　うん。
滋　柴崎は？
柴崎　俺は…、どうするかな。
滋　得意の英語を活かすんじゃないのか。
柴崎　…でかい仕事をするよ。滋が驚くような。

滋　負けられないな
柴崎　お前には負けねえ

二人は笑う
「戦地に行く兵隊さんのために、千人針のご協力をお願いします」と声が聞こえてくる
素子　ちょっと行ってくるわね。

二人になる

滋　…行くんだよな。俺たちも。
柴崎　「お国のため、張り切っていってまいります！」って、似合いそうだな。
滋　柴崎だって行くんだぜ。
柴崎　俺は、ごめんだな。男ばっかりだろ？面白くない。
滋　（笑う）
柴崎　俺でなくちゃできないことで命を懸けたいよ、どうせならさ。
滋　…ああ。

間

柴崎　滋は野球で天下を取れよ。ベーブルースからも三振獲っちまえよ。
滋　野球の神様だぜ（笑う）。
柴崎　あんな巨人、きりきり舞いさせたらかっこいいぜ。
滋　そうだな。

二人は笑う。
明かりが変わっていく

3-2場
修が現れる

修　昭和１２年。この年の７月には盧溝橋事件。三人が学校までの坂道を上っていた頃は、日本が長い戦争に入っていく前日ともいえる頃でした。藤本滋は日本レンジャーズに鳴り物入りで入団。あっという間に人気選手になっていきます。その頃、自分は新聞社にいたんです。大手新聞毎朝新聞。滋君のことは大いに書きましたよ。「黄金の右腕」「しなる右腕から放たれる剛速球」。４年ののち、昭和１６年１２月。太平洋戦争。若者はどんどん兵隊にとられていき、野球はだんだん

肩身の狭い存在になっていきました。非常時に球遊びにうつつを抜かしている場合ではないそうで…。野球を続けたい面々は、必死に策を練ります。入場料を戦闘機購入の寄付金にする。試合の前に投手たちによる手榴弾投げ競争をする…。お国のためという名目が無ければ、何をするにも肩身の狭い時代。滋君にも、とうとう赤紙が来ました。

国民服を着た滋の姿が見える
東条英機の声が聞こえてくる
「諸君の燃え上がる魂。その若き肉体。清新なる血潮。総て是れ御国の大御宝なのであります。この一切を大君の御為に捧げ奉るは皇国に生を享けたる諸君の進む只一つの途であります。諸君が悠久の大義に生きる唯一の道なのであります」

４－１場　松田家　１０月
テレビから、悲劇のピッチャー、藤本滋が、後楽園球場に帰ってくる。と大げさな感じで流れている。

夕子　藤本滋ってそんなに強いの？
柴崎　黄金の右腕って聞いたことないか？日本レンジャーズの人気は彼が作ったと言っても言い過ぎじゃないな。
夕子　いつの話よ、それ。
柴崎　…最後に登板してから…、もう１１年も経つのか。
夕子　子供だったもの。覚えてないわ。
柴崎　嘘をつけ。
夕子　（笑って）興味なかったら、知らないわよ。テレビだってなかったんだし。
柴崎　子供がみんな藤本滋のピッチングフォームを真似したんだぜ。
夕子　でも、長いことやってないんでしょ？弱くなっちゃってるんじゃないの？年だって取ったわけだし。
柴崎　まあな。でも、伝説の投手だ。藤本滋が戻ってくるとなれば、ファンは盛り上がるさ。
夕子　戦争で？
柴崎　ああ。中国に行っていたらしい。
夕子　でもずいぶん…
柴崎　シベリア帰りだ。
夕子　まあ。大丈夫なの？駅で見たもの。シベリア帰りの人。骨と皮だけになってたわよ。それを使うだなんて、旦那様も大物ね。
柴崎　（笑う）いい視聴者だよ君は。そう思われたくって流してるんだ。この宣伝。自

分の局だからな、イメージアップのことしか流さない。

と、突然、柴崎が夕子にネックレスをかける。

夕子　…あら。…なに？
柴崎　やっぱり似合うな
夕子　そう？
柴崎　それにしてよかった。似合うよ。
夕子　…今度は、何？
柴崎　素直に喜べよ。プレゼントだ
夕子　ふーん
柴崎　天使だってさ
夕子　は？
柴崎　君を見て、天使が現れたと思ったそうだ。ジェファーソンは。
夕子　…
柴崎　学者だ。先週、ここに来ただろう？背の高い…赤毛の…。
夕子　よく来るわよね、最近は。また来るの？
柴崎　ああ。奥の君のおもてなしが功を奏したな。
夕子　外国人って、みんな芸者が好きなのかしら。
柴崎　取引する相手には、「特別扱いされている」と思わせろっていうのが、松田の指令だからね。奥の君は芸者上がりだろう？昔のつてを使って赤坂の人気芸者を一堂に集めたらしいぜ。
夕子　またドンチャン騒ぎがあるってことね。
柴崎　でも君は、宴会には出なくていいだろう？
夕子　そりゃそうだけど…いろいろ厄介なのよ。
柴崎　ま、その厄介なことの一つかもしれんが…、ジェファーソンは是非、また君に会いたいそうだ。
夕子　…
柴崎　あと一歩なんだよ。難攻不落の城を落とすまで。あとは学者側を取り込めばいい。ジェファーソンの発言は、影響力が大きい。
夕子　一緒に会えばいいんでしょ？

柴崎、夕子に鍵を渡す

柴崎　部屋を予約してある。君はそこで待っていればいいんだ

間。柴崎は無言の夕子を引き寄せる。

夕子　やめてよ

柴崎　あいつに自由にされるのかと思うと、ちょっとなあ

夕子は柴崎をすり抜け、鏡に姿を映す。柴崎は、夕子のすぐ後ろに立つ。間。

夕子　ネックレスを女に渡す。その心は？

柴崎　なんだよ

夕子　首輪なんですって、これ。

ワンワン！とふざける夕子と柴崎。明かりが変わっていき、夕子が一人残る。

5場

松田の別宅　深夜

天体望遠鏡を覗いて、星めぐりの歌を歌っている夕子。そこへ松田。

松田　おや。

夕子　あら旦那様。もうお休みになっているのかと思って…勝手にすみません。

松田　いやいやいいよ。…何が見える？

夕子　…何でしょう。赤い星を見ていましたわ

松田が天体望遠鏡を覗き

松田　アンタレスだ。さそり座の。さそりの心臓とも言われるね。

間

松田　…ご苦労だったね。

夕子　え？

松田　いや、なに。遅くまでつき合わされて君も大変だ。

夕子　日帝ホテル、懐かしかったですわ。幼いころは両親に手を引かれて、よく泊まりに行きましたもの。幸せだったころのこと、思い出してしまいましたわ。

松田　そうか…

夕子　今年は、マリリンモンローも泊まったのでしょう?なんだかドキドキしてしまいましたわ。

松田　おお。そうだったね。

月の光が差し込んでくる

松田　いい月だな
夕子　ええ。
松田　やっぱりこれより実際に見るほうがいいな。こいつは、肩が凝る。
夕子　（笑う）
松田　君は、月に行ってみたいとは思わんか？
夕子　ええ？だって、無理ですわ。
松田　飛行機ができて空も飛べるようになった。電話ができて、遠くにいても話ができるようになった。テレビができて、家にいたまま野球の試合が見られるようになった。そう思えば、月にも行けるだろう。
夕子　まあ。（笑う）
松田　太陽を地球に作ることだってできるようになるはずだ
夕子　ええ？
松田　（笑う）そうそう。そうやってわしは、人を驚かせたいんだよ。人生は、長いからね。退屈してしまうだろう？
夕子　どうして、月へ行きたいんですの？お会いしたい方がいらっしゃるのかしら。
松田　君は宇宙人を信じているのか？
夕子　（笑って）いたらすごいとは思いますけれど…。亡くなった方はお星さまになるって言いますでしょう？
松田　ロマンチックだねえ。
夕子　久保田愛吉さんも、お星さまになったところですかしら
松田　テレビじゃ、ずっとそのニュースだね。
夕子　旦那様は、困るのでしょう？
松田　え？
夕子　難しいことは分かりませんけれど、旦那様がなさりたいことを進めるには、日本のみんなが久保田さんをおかわいそうだと思い続けていることがあまりよくないのでしょう？

間

松田　まあいいんだよ。いいんだ
夕子　え？
松田　着々と進めているんだよ。空前絶後を起こすためにね。

夕子　空前絶後を…
松田　知らないほうがいいこともあるだろう？
夕子　ええ。悲しいことは、もううんざりですもの。
松田　もう日本は悲しい目には合わない。どんどん豊かになっていくんだ。原子力法案もね、いずれは先見の明があったと感謝されるはずだ。アカの奴らは、何をしても文句をつけるからね。核の被害を知る国が、核を克服し、核を平和に利用する。これは、日本にしかできないことなんだよ。
夕子　世界中で日本にしかできないことがあるだなんて誇らしいですわ。
松田　君のように素直な人間ばかりだったら、日本は夢のような早さで成長するよ。世界一も夢じゃない。
夕子　とにかく揉めるとね、決まらないんだよ。
松田　文句を言う方には、どうしているんですの？
夕子　文句を言うのは一部の人間だ。それに大衆は流される。知らなければ、文句は出ない。理解できなければ諦める。
松田　ええ。難しいのは苦手ですわ。
夕子　３Ｓって聞いたことはあるかい？
松田　いいえ。
夕子　Ｓのつく楽しいものと言えばなんだい？
松田　英語は苦手ですもの。
夕子　（バットを振る真似）
松田　野球！
夕子　野球は、BASEBALL だろう？
松田　あら。あ！スポーツ！
夕子　そうだ！正解！あとは？
松田　分かりませんわ。
夕子　君が好きなものじゃないかな。
松田　あら。なんでしょう？
夕子　SCREEN と SEX だ。
松田　まあ！（ぶつ）
夕子　（笑って）大衆が夢中になるものが３Ｓ。アメリカで考えられたそうだよ。SPORTS,SEX,SCREEN。人生は楽しいほうがいい。難しいことは専門家に任せておけばいい。あと…５年だな。５年もしたら、全てを忘れるさ

６－１場　明かりが変わっていく

修　このときから、松田は原子力平和利用キャンペーンを大々的に展開していきます。日本新聞では原子力平和利用啓蒙キャンペーン記事が繰り返し特集されています。人は不思議ですね。毎日見ると、親しみがわき、毎日聞くと、重要なことだと思うようになる。滋君久々の登板は連日報道され、当日、後楽園球場は満員御礼。４万人の人々の熱い視線が、藤本滋に注がれました。…残念ながら、滋君は二回持たずに降板。日本レンジャーズは大阪パイレーツに敗れ、同時に、中京ドラゴンズ優勝が決まりました。５年後、昭和３４年。日本レンジャーズは首位を独走中です。なんていったって今の日本レンジャーズには、永嶋がいますから。今年は、首位打者になるんじゃないかなあ…。さて、素子、夏子だけでなく、反核、反戦を掲げた市民運動は世界中で続けられました。世界的な世論の後押しもあってか、この年、ソビエト、アメリカ、イギリスは水爆実験中止を決定します。同じころ、日本では時の首相が「目下、我々は海外派兵を禁止されているので、憲法の改正が必要である」と発言。海外派兵。実際に戦場に行き、死と向かい合ったとき、あいつは…弟は…何を思ったんだろうと考えることがあります。

望遠鏡を覗き

修　さそり座のアンタレスが見えますよ。…「どうか神様、私の心をご覧ください。こんなに虚しく命を捨てずにどうかこの次には、誠にみんなの幸いの為に私の身体をお使いください」…

６－２場

昭和３４年　６月１６日　安田家

皇太子ご結婚のニュースが流れている。明かりが変わると、修が星めぐりの歌を歌いながら、天体望遠鏡を覗いている。自転車が止まる音。

夏子　（声）ごきげんよう。葉子さん。聡美さん。ごきげんよう。

真っ白のテニスウェアを着た夏子が現れる。

修　おかえり

夏子　ただいま帰りました。お父様。

修　何の真似だ。気持ち悪い。

夏子　あら。いつもと同じですわ。

修　なあ。いつ連れてってくれるんだ？すき焼き。

と、言った途端、夏子は天体望遠鏡に気が付き

夏子　あー！！

修　なんだ大きな声で。

夏子　ちょっと、それ！

修　これは…あれだよ。知力向上のための…

夏子　いくら？

修　ボーナスで買ったんだよ。ボーナスで。

夏子　ボーナスで、テレビ買うって約束したじゃん！！

修　いや、あれだよ。最新式だぞ。今日を逃したら、いつ手に入るか…

夏子　考えられない！もう、みんな持ってるのに。テレビ。

修　みんなって誰だよ。

夏子　葉子さんでしょ。聡美さんでしょ…

修　お前のみんなは二人だけか？

夏子　違うもん。みんな持ってるもん。まだテレビがないだなんて時代遅れだよ。

修　どうせ会社帰りに遊び歩いてるんだから、テレビなんて見る暇ないだろう？

夏子　社交！社交をしてるの。

修　なにが社交だ。うちみたいな一般庶民が使う単語じゃない。

夏子　ご成婚パレードだって、見たかったのに。あの時だよ。パレード見るためにみんなテレビ買ったんだから。

修　二人だろう？

夏子　3年。あと3年しかないの。

修　何の話だ。

夏子　あと3年で、とっておきの王子様を見つけないと。

修　待て。いきなりテニスを始めた理由はそれか？

夏子　悪い？

修　美華子様だからだぞ。美華子様だから、皇室から声がかかったんだぞ。

夏子　皇室だなんて、そこまで言わないわよ。でもさ、わかんないじゃない？ヨーロッパとかの王子がお忍びでテニスをしにきててさ、その王子は、すっごくテニスが上手なの。でもね、いきなり球を打ち損ねるの。王子のテニスのお相手はご学友で、この人もなかなか爽やかだったりするんだけど、で、「殿下、どうなされました？」すると、王子は言うの。「いや、可憐な花に目が奪われてね」ご学友。「花？花などどこに…」王子はふっと笑って、そして、私のそばにやってくるのそして私の手を取り、囁くように聞くの。「君の名は？」

修　お前は可愛い。かなりな美人だ。それは認めるが、そういうところだぞ。残念な感じが漂うのは。
夏子　残念な感じって何よ。
修　しかもヨーロッパの王子がどうして日本語がしゃべれる設定になってるんだよ。
夏子　そんな細かいことといいじゃん。
修　ちょっと待て。この服、前から持ってたか？
夏子　いいでしょ？美華子様がお買いになったって店で探したの。
修　ボーナスか？
夏子　ボーナスよ。
修　ボーナスで、今長のすき焼きをごちそうするって言ってたよな？
夏子　そうだった？
修　調子がいいんだ。調子がよすぎる。適当にその場の乗りでぺらぺらと…。
夏子　でもお父さんだって、勝手にこれ買ったじゃん。テレビ買うって約束だったでしょ？
修　テレビはいつでも買えるだろ？
夏子　そう言って冬のボーナスの時も買ってくれなかったじゃん。
修　（いきなり泣きを入れる）男手一つで苦労してお前を育ててきたって言うのに…
夏子　投資だから！運命の君を見つけて、左うちわで暮らせるようになったら、すき焼き食べ放題だから！

素子

素子　何？何の騒ぎ？
二人　おかえりなさい。
素子　ただいま。
夏子　そうよ！レーニン平和賞のニュースだって見られなかったじゃん！！
修　まあ、確かになあ。でも、夏子はニュースの時間はテニスに行ってただろ？
夏子　保存しとけないのかな。後から見られるようにさ。そしたらもっと便利じゃない？
素子　あら？テレビ…
修　テレビの代わりだ（と、天体望遠鏡を指す）
夏子　信じられないと思わない？お父さんは、一家の主だよ。一家の主が家族の幸せより自分の趣味を優先するなんてさあ。
修　夏子だって社会人だろう？今までの感謝を込めて、テレビを家族にプレゼントしてくれたっていいんじゃないか？
夏子　私のボーナスは私のもんだもん。

修　じゃあ、俺だって…
夏子　お父さんの働いたお金は家族に還元してよ。ご飯だって洗濯だって、素子おばさんと私でやってあげてるんだからさー。
修　（分かった分かった）
夏子　でもテレビってすごいよね。レーニン平和賞を素子おばさんが受賞したってテレビで流れた途端に、署名の数がうなぎ上り！
素子　やってることは変わらないんだけどね。
修　葉子さんも、聡美さんも、素子おばちゃんのこと、すごい方だったのねって褒めてるし。
修　じゃあ、署名活動に参加してくれたり…
夏子　それはないんだよねー。葉子さんは署名はしてくれたけど。
素子　学校でも話がしやすくなったかもしれないわ。
夏子　社会的なこと？
素子　そうね。政治的なことを学内では話さないようにって空気もあるから。
夏子　確かに、堂々としろよ。
修　いつでも堂々としろよ。
夏子　そんなこと言って、お父さん手伝ってくれたことないじゃん。辛いよ。何時間も寒い中立ってて、誰も立ち止まってくれないのって。

と、停電。

素子　停電？
夏子　えー。また？
修　蝋燭どこだ？
素子　茶箪笥のこうやってあける…
修　身振りで説明するな。見えない。
素子　えっと、横に…
修　引き戸か？
素子　そう！その下の引きだしに確か…
修　ないぞ。
夏子　じゃあ、隣の引きだし。
修　夏子ここはいいから、皿持ってこい。蝋燭立てるやつ。
夏子　えー？暗いのに。
修素子　痛い！
修　夏子、気をつけろ！
夏子　だって狭いんだもん。

修　どうやったら、二人の足をいっぺんに踏めるんだよ。
素子　あ！
修　どうした？
素子　眼鏡落としちゃった。
修　ええ？
夏子　ストップ！！
修　は？
夏子　ドントムーブ！
素子　なんで英語？
夏子　これからの女性は国際的にならないとって思って。
修　今じゃなくていいだろう。
夏子　シャラップ！
修　なんだよ。
素子　あ！これは？
修　なんかべたべたするな。
素子　最近蒸し暑いからじゃない？

と、修が手探りで蝋燭をつけようとする。（マッチをするたびに三人の姿が見えたり消えたりする）

修　あれ？芯がないぞ。
夏子　貸して。ほんとだ。まあ、点けてみようよ。

点かない

修　他探すか。
夏子　プリーズジェントリー。
修　日本語で話せ。お。あったぞ。

やっと、ろうそくをつける。修が何やらごそごそしている

夏子　動かないでよ。火が消えちゃうじゃん。
修　ん？うん…
素子　何を探してるの？
修　いや…

少し間

素子　停電ってちょっと楽しいわよね。
夏子　ええ？面倒くさいじゃん。
素子　兄さん、台風好きじゃない？
夏子　あー、確かにね。やたらに張り切るからね。

ラジオから音。修、ろうそくの明かりでチューニング

素子　ニュース？

野球中継が、かなりな雑音入りで聞こえる

夏子　野球？？？
修　７時だろ？
夏子　信じられない。この非常事態に野球？？？
修　５連勝できるかどうか、見逃せないだろう。
素子　どうしてるのかしらね…。
夏子　え？何の話？
素子　滋君。今頃どうしてるんだろうって思って…。
夏子　滋君？
素子　日本レンジャーズの…
夏子　藤本滋か！あいつ、ひどくない？失踪ってさ、どこまで弱いんだって話だよ。
素子　なっちゃん、私、友達だから。
夏子　あ。ごめん。でもさあ、あんなの縁切っちゃってもいいかもよ。心が弱すぎる。
素子　もともとは本当にすごい選手なの。あの試合は、残念だったけど…。
修　完投まではできなくても、もう少しなあ…。
素子　でも、次は勝ったかもしれないし。
修　いや。肩がな…。本人が一番分かってると思うよ。もともと球種は多くはなかったが、頼みのストレートが、全部シュート回転しちまって…。高めに浮いちまうんだよな。
素子　奥様もご心配でしょうね。
夏子　そうだよ。戦争で長いこと会えなくて、やっと帰ってきたと思ったら失踪しちゃうだなんてさ、ひどすぎるよ。
修　女の子が生まれているらしい。
夏子　子供がいるのに失踪？！酷い！もう鬼畜並みだね。

素子　私…友達…
修　出ていくときは知らなかったんだよ。だから、それを知ればさ、滋君も考え直すんじゃないかと思うんだよ。
素子　じゃあ、奥様は一人ぼっちってわけじゃないのね。
夏子　でも一人で育ててるんでしょ？大変だよ。可愛そうだよ。
素子　子供を育てるのは、大概女のほうなんじゃないの？
夏子　そうだけどさー。でもさ、失踪したときは、毎日テレビでやってたじゃん。今はどうしてるんだか全然わからないよね。
素子　そうね。
夏子　お父さんも、こういう時に役に立ってよ。
修　何だよ。
夏子　どこにいるかとか突き止めてよ。
修　探してるぞ、ずっと。でも、探偵じゃないからな。
夏子　まあ、そうだけど。（と、ラジオを切る）
修　おい。何で切るんだ。
夏子　聞こえないじゃん。ザーザーいってて。

間。ただ蝋燭を見つめる三人。

夏子　なんか暗いね。
修　二本に増やすか。

さっきのつかなかったろうそくを持って

修　…これはやっぱり違うんじゃないか？
素子　眼鏡がないからわからないのよ。
修　ちょっと舐めてみろ。
素子　嫌よ。蝋燭なんか。
修　甘いんだよ。これ。
夏子　え？なに？
修　千歳あめだ。
夏子　えええ？なんで千歳あめが引き出しに入ってるのよ。え？いつから？
素子　あー…
修　もう少し、確かめてから片付けろ。蟻が来なくてよかったな。
夏子　眼鏡買い替えたら？ボーナスで。
素子　でもまだ使えるしね。

夏子「えええ？」と素子を見る。蝋燭に照らされる三人。間。

素子　今度ね、『スター百一夜』に出ないかってお誘いがあったのええええ！すごい！水森弘に会ったらサインもらってきて。

夏子　目論見は何だろうな。

修　一度松田さんにお会いしたのよ。とても感じのいい方だったわ。

素子　テレビに出たら、署名の数が一気に増えて万々歳じゃん。

夏子　その署名活動に、松田は…「スター百一夜」の局の社長だが、反対の立場なんだよ。だからさ。何かあるんじゃないかと思うだろ？

修　「核には核を」なんでしょ？放射能はレントゲンにも使われてるし、アイソトープは、若返りも期待できるんだって。すごくない？

夏子　ああ。アイソトープの特集は最近すごいな。

修　感じがよかったんでしょ？松田さん。

夏子　ええ。

素子　テレビでもにこにこしててい人そうだったよ。素子おばちゃんの事呼んでくれたんだし、いい人なんじゃない？

夏子　いい人…かなあ…。

修　よく見ると、可愛い顔してるし。それとさ、こう度重なる停電には閉口するでしょ？これから日本がどんどん経済成長していくときに、それじゃダメでしょ？

夏子　それに、水力発電はダムを作るでしょ？自然破壊よ。それにひきかえ、原子力発電は自然に優しいエネルギーなんだから。

二人　…。

夏子　って、テレビで言ってた。

修　偉そうに言ってるときは、いっつもそうだ。

夏子　だって、そう言ってたよ、テレビが。

素子　なっちゃん。なっちゃんは、どうして世界中でこんなに多くの署名が集まったんだと考えてる？

夏子　そりゃ、…怖いし、不安だから。

素子　そう。核は怖いし、核は不安。それは絶対に忘れちゃいけないんじゃないかしら。

夏子　そうだよ。そうだけど。平和的に利用するんだって。平和的ならいいんじゃないの？

修　その論調の新日本テレビに、なんで素子が……柴崎君か？

素子　柴崎君？

修　彼が意見したって可能性もあるな。

夏子　誰？

素子　幼馴染。
夏子　じゃあ、そうだよ。推薦してくれたんじゃない？
素子　松田さんは、様々な意見を聞かせてほしいんですよ。っておっしゃってたわ。なっちゃんみたいな子が大半だと思うのよ。だから、この機会を使うの。私達竹の子会の意見がテレビで流れたら、それをきっかけに考えてくれる方も増えると思うの。
夏子　私みたいな子ってどういうこと？
素子　素直な人ってこと。いい意味でも悪い意味でも。
夏子　え？悪いの？
修　まあ…何か考えがあってのことだろう。タヌキだからな。世の中のトップに上り詰めたやつは大抵タヌキだ。…素子。慎重になったほうがいいぞ

と、言うと、メリッという音。

三人　あ！

明かりがつく。眼鏡は壊れている。

7場　翌日　松田別宅

壊れた眼鏡を持参しつつかしこまっている素子に、夕子がコーヒーを出す。

素子　すみません。わざわざ。
夕子　いえ。

間

素子　かしこいワンちゃんですのね。お手も、お変わりもやってくれましたわ
夕子　あら。実は、人を選ぶんですのよ。松田なんて、いまだに吠えられ続けていますもの。
素子　お名前は？
夕子　ボギーです。ハンフリーボガードのボギー。二枚目なんですのよ。ドーベルマンの中でも特に。似合いの名前ですわよね。お宅では、犬は？
素子　以前、ボギーのような二枚目じゃなくて、雑種の…真っ白な犬を飼ってました。でも、供出がありましたから。
夕子　ああ。戦地に入る兵隊さんのためにって…。でも、犬の毛皮でマフラーってね。今考えると、ちょっと笑っちゃいますわね。

素子　え？
夕子　あらごめんなさい。実際、その犬のマフラーを身につけた人の話って聞いたことありまして？
素子　あら。…そうね。じゃあ、シロはどこに連れていかれたのかしら。
夕子　シロ？
素子　ええ。可愛かったんですの。捨て犬だったんですけど。主人が拾ってきて…
夕子　まあ。優しい旦那様ですのね。
素子　…ええ。
夕子　旦那様はご理解があるのね。女が前に出ていくことを好ましく思わない殿方も多くいるでしょう？
素子　主人は、今は…（首を振る）
夕子　あら。ごめんなさい。悲しいことを思い出させてしまったのね。
素子　いえ。
夕子　女一人で頑張っていらっしゃるなんてねえ…。
素子　…いえ。まだまだですわ。

間

夕子　ねえ。ちょっと、手を見せてくださる？

と、いきなり夕子は、素子の手相を見る。

夕子　やっぱり。レーニン平和賞をお取りになっただけあるわ。運命線がはっきり出てる。でも…
素子　でも？
夕子　男性の運はよくないのね。
素子　…あー…。手に現れていますの？

と、なぜか二人が手相で盛り上がるところに柴崎

夕子　あら。おかえりなさいませ

素子も慌てて立ち上がるが、眼鏡をかけていないので誰だか分かっていない。

素子　お邪魔しております。
柴崎　…（夕子に）いつお着きに？

夕子　５分ほど前ですわ。
柴崎　君が相手を？
夕子　ええ。
柴崎　コーヒーを淹れてくれないか？
夕子　コロンビアを切らしてますけど、どうなさいます？
柴崎　いや、何でもいい

夕子は奥へ

柴崎　受賞、おめでとうございます。
素子　ありがとうございます。このたびは、どうして私のようなものを呼んでくださったのか…。私の幼馴染が貴社に居りますもので、もしかしたら推薦してくれたりしたのかと家族と話していたんですが…。
柴崎　…
素子　柴崎敏之って言うんです。いつもお世話になっております。
柴崎　その、柴崎敏之です。
素子　え？（眼鏡を顔に当てる）あ…

間

柴崎　眼鏡、買い替えろよ。何年使ってるんだ？
素子　２５年
柴崎　（笑う）
素子　松田さんの奥様って、お若いのね
柴崎　あれは、女中だよ。松田の奥方は、鎌倉の大豪邸にお住まいだ
素子　女中さんで、あんなにきれいな格好をしてるの…（溜息）
柴崎　ここは、政府のお偉いさんや、アメリカの要人もくるからね。茶を出すにしても…ってことさ

間

素子　ありがとう。私のこと、呼んでくれて。
柴崎　…いや。決めたのは松田だ。社長だよ。

間

柴崎　戻ったんだな、荻窪に。
素子　四谷の家は、空襲で焼けちゃったから。
柴崎　ああ。…酷かったなあの辺は。
素子　義理の姉さんが空襲で…。
柴崎　叔江さんが？
素子　叔江義姉さんと、はじめくんとたけしくん。まだ、3歳と1歳だったの。
柴崎　…明るい人だったよな。
素子　兄さんの結婚式、柴崎君も滋君も出てくれたものね。
柴崎　じゃあ今は…4人か？
素子　3人。兄さんと兄さんの娘と私。兄さん家、5人家族だったのにね。
柴崎　旦那はどうしたんだ？
素子　…柴崎君は？アメリカに行ってたんでしょう？
柴崎　仕事でだよ。
素子　英語で仕事をするって言ってたけど、本当にそうなってるのねえ。
柴崎　まだ、あの学校の教師をしてるんだろう？
素子　そうよ。
柴崎　署名活動はずっとやってるのか？
素子　ええ。
柴崎　あの坂の下でだろ？
素子　見たことあるの？
柴崎　まあな。
素子　声をかけてくれれば…。ああ、そうね。
柴崎　なんだよ。
素子　松田さんも一緒だったのかしら、と思って。
柴崎　どうだったかな。
柴崎　偉くなっちまったな。レーニン平和賞とはね。
素子　私達の運動が評価されて、みんなの代わりにもらってきただけ。それに、レーニン平和賞って知ってた？
柴崎　ソビエトが、ノーベル賞に対抗して作ったんだろ？
素子　そう。ソビエトが作った賞。それを知った途端に嫌な顔をする方もいるわ。
柴崎　ま。そういう面もあるな。
素子　ええ。

少し間

柴崎　明日は何をしゃべるつもりだ？

素子　松田さんからは、レーニン平和賞の授賞式の様子と、受賞に至った今までやってきた活動、その苦労とかを分かりやすく話してもらえばいいって言われてるわ。君は、原子力の平和利用についてはどう考えてるんだ？

柴崎　読んだわよ。柴崎君の署名記事。「しかし欲しなくとも原子力時代は来ている。恐ろしいからと背を向けているわけにはいくまい。恐ろしいものは用いようで素晴らしいものになる」うまい記事だなあと思ったわ。

素子　うまい事言いくるめてるなあと思った。ってことか？

柴崎　そうは言わないけれど…。

素子　核の持つ破壊力は凄まじい。人類を滅亡させてしまうかもしれないほどの破壊力を持っている。だからこそ戦争への抑止力になるとは考えられないか？

柴崎　じゃあ、なぜ水爆実験が繰り返されているの？

素子　ある意味パフォーマンスだ。あの国には、戦争を仕掛けられない。と他国に思わせるための。

柴崎　パフォーマンスのために、第五福竜丸の船員さんは被爆したのよ。日本は３回も被爆したの。核は、他の兵器と違って放射能の被害があるわ。それは、一生、いえ、次の代にも付いて回る。私、世界大会の時に第五福竜丸の船員さんのご家族に話を聞いたわ。髪の毛が抜ける、紫の斑点が出る、下痢、嘔吐、高熱。そして凄まじい倦怠感が抜けず、働けない。広島長崎で被爆された方と同じ症状だわ。誰であっても他人の暮らしを破壊する権利なんてないと思うの。凄まじい破壊力を持った核を…人間が扱えるとは私には思えない。それに…

素子　それに、何だ？

柴崎　被爆の症状に対する治療方法をアメリカは知っているはずよ。広島、長崎でABCCを設立して、原爆の被害を研究したわ。どんなに酷い火傷の方や紫の斑点が浮き出ている方を前にしても、撮影と記録をするだけで治療は一切しなかった。奇形児が生まれた時には研究所に持ってこいとも言っていたそうだわ。そんな、非人間的な

素子　★ABCCについては言うな。明日、カメラが回っているときに、絶対に話すんじゃない。

柴崎　どうして？知るべきことでしょう？日本中が、いえ、世界中が知っておくべきことだわ。

素子　お前のためだ！！…レーニン平和賞をもらって偉くなったとはいえ、素子一人の存在なんて国家に比べたらちっぽけだ。自分の身を守ることも考えろ。

柴崎　そうやってみんなが黙ってしまったら、世界は何も変わらないわ！

素子　（笑う）

柴崎　え？

素子　変わらないな。素子はずっと級長のままだ。正しいことしか話さない。ただ、そ

れを偽善だと感じる人間もいるってこと、知ってるだろう？

素子　…

柴崎　明日、素子がしゃべるのは教室じゃない。テレビ局だ。聞いているのは生徒だけじゃないし、君は先生でもない。

素子　分かってるわ。

柴崎　テレビにはテレビのルールがある。

素子　松田さんのテレビ局だものね。

柴崎　まあ、そういうことだ。

けたたましく犬の吠える声が聞こえる

柴崎　…時代が変わったって話さ。これから豊かな暮らしのために原子力は利用できる。そう言っているだけだ。石油、石炭だって地球上にいつまでもあるわけじゃない。原子力なら、少量のウランで莫大な電力を生み出せる。人間の知恵が生み出したエネルギーなんだよ。国家が決めた原子力予算も、原子力大学を設立し、未来のために有能な原子力の学者を育てようというんだ。日本は台風の被害が毎年あるだろう？原子力には台風の進路も変えられるかもしれないって言う案もあるんだぜ。

素子　仮に、台風の進路を変えられたとして、その海の魚は被爆して食べられなくなる。原子マグロみたいに。それに、その海の近くにも島があるわ。そこで生活している方もいるはずよ。日本人が台風を逃れるために、そこにいる島の方の健康を犠牲にすることになるわ。

柴崎　医学界の進歩も驚異的だ。かつては不治の病だった結核だって、今や克服しているだろう？それにだ。原子力発電はいまだ一人の犠牲者を出していない。片や、プロパンガスじゃしょっちゅう死亡事故だ。どうして原子力発電だけがガタガタ言われるのか理解できないよ。

素子　私、やっぱり信用できないのよ。

柴崎　なんだよ。

素子　見落としてはならない議論をあえてしていない気がするの。

柴崎　主語がない。日本語は気をつけないと責任の所在があやふやになる。誰が、議論をしていないんだ？

素子　日本政府がよ。大切なところをわざと避けるように議論の方向を変えている気がするの。

柴崎　反政府主義ってやつか。

素子　主義なのかはわからない。ただ、気になるの。今、政府は再軍備を進めているでしょう？平和憲法があるのによ。そんな中で、核が軍事利用されないって信じる

方が難しいわ。

柴崎　原子力委員会の三原則は「公開、民主、自主」だ。進め方は公開されるさ。

素子　でもこの間、「可及的」に公開されるとか言ってたじゃない。都合が悪くなると、難しい言葉を使ってごまかそうとするのよ。

柴崎　（苦笑い）

松田が入ってくる。

松田　よくいらっしゃいました。明日は、大いに語ってください。打ち合わせは、あちらで。貴方に会いたいというスポンサーが来ているんですよ。

素子を、夕子に案内させる。二人になる

柴崎　本当に、喋らせる気ですか？

松田　議論をする女は好かんね。素直なのが一番だ

柴崎　…では…？

松田　あの女のスキャンダルを探せ。徹底的にだ

柴崎　しかし、叩いて埃の出るタイプでは…

松田　なら作り出せ。あのタイプの女は、イメージが壊れたらひとたまりもない。そこへ天覧試合だ。みな、忘れていくさ。難しいことは。

８場

収録の帰り　車の中　６月１８日

運転するのは柴崎。助手席に素子。

少し無言

柴崎　（溜息）

素子　言いたいことがあるなら言えば？

柴崎　昨日言った。言ったはずだ。

素子　…嘘は言ってない。本当のことを話しただけよ。

柴崎　嘘か本当かは問題じゃない。

素子　…

間

柴崎　君の旦那は今、市川にいるらしい。

素子　…調べたの？
柴崎　もう１０年だろう？いい加減籍を抜いてもいいんじゃないか？
素子　何が言いたいの？
柴崎　君も偉くなっちまったからね。
素子　私は、何も変わってやしないわ。
柴崎　素子自身が変わって無くても、君のイメージが変わった。だからさ、戦争で行方知れずの夫を待つ妻としておくのが得策だってことだ。まさか、夫が親子ほど年の離れた１７歳の教え子と駆け落ちしたまま行方知れずとはね。世間は面白がるぞ。
素子　そうでしょうね

間

柴崎　上手くいっていると思ったよ。仲のいい夫婦に見えた
素子　はじめはね。そりゃあ。

間

素子　あの人は、尊敬されたいの。「何でも知ってるんですね」「知りませんでした」って、言われることが幸せなの。…私は、物を知りすぎて可愛げがなくなったのね（と、笑う）
柴崎　…なるほどね
素子　女は、男と並んで歩いてはいけないのかしら。
柴崎　まあ、支えてほしいと考えるのが、男の常じゃないのか。

間

素子　どうなるの？
柴崎　…
素子　捕まったりするの？私。
柴崎　あれだけ威勢良くしゃべって、今更怖くなったのか？
素子　柴崎君が、喋るなって言ったから。
柴崎　…

歓声が聞こえる。それは、後楽園球場からの歓声。柴崎は車を止める。

柴崎　もう少ししたら、ナイター用の照明が入る。
素子　…後楽園球場…。
柴崎　ああ。見に来たよな。滋が登板するときにさ。
素子　滋君、たくさん三振獲って…かっこよかったな。
柴崎　ああ。
素子　「打たれた！」って思ったときは、私見ていられなくて…。
柴崎　ファールだっただろ？大抵。
素子　だって、一瞬ホームランかしらって思うんだもの。
柴崎　ボールを追えばわかるだろう。
素子　ちゃんと見てたわよ。滋君がマウンドに上がるとき、すごい歓声で…。あの人、あのピッチャーは私の友達なの！って叫びたい気持ちだった。
柴崎　あの球場も日本レンジャーズも松田のものなんだ。…松田は今、天覧試合を実現するために駆けずり回ってるよ。天皇陛下がナイター観戦を所望していてね。
素子　陛下が野球を？お相撲をご覧になるのは知っていたけれど。
柴崎　ああ。国技だからね。野球を国技にするためには陛下に見てもらうのが一番だと松田は考えたんだろう。
素子　…陛下があそこにいらっしゃるの…あ。

ナイターの照明が付いたらしい

柴崎　綺麗だよな。ナイターの明かりってさ。
素子　ええ。
柴崎　見に来たらいい。これを見せれば、特別席にご案内しますよ。

柴崎は名刺を素子に渡す

素子　ふーん。
柴崎　なんだよ。
素子　相変わらず気障だなあと思って。
柴崎　お前もさ、まずはありがとうだろ？そういうところが可愛げがないんだよ。
素子　うるさい。

間

素子　ありがとう。

間

素子　柴崎君だと、何でも言えるんだけどなあ。
柴崎　ええ？
素子　旦那の前だと、…いつでも気を遣っていたわ
柴崎　俺にも少しは気をつかえよ。
素子　（笑う）

二人、ナイターの明かりを見る。

柴崎　少しは休めよ。
素子　え？
柴崎　普通の幸せを求めたっていいんじゃないのか？

柴崎、素子の眉間を指さす

柴崎　いつでも眉根にしわを寄せて、議論してるのだけが人生でもないだろう？
素子　…

柴崎は、素子の肩に手を回す。少し体を預ける素子。
間。
フラッシュが光る。野球の歓声が大きくなる。

9－1場

修　このスクープ写真は、うちの雑誌社にも匿名で送られてきました。多くの雑誌社はこの記事に食いつきます。悪く書くほど、刺激的に書けば書くほど売れる。「ショック。女性社会運動家の禁断愛」「問われる女性の社会進出旗手の資質」「安田素子の下劣な貞操観念」…ってね。

9－2場

6月25日。天覧試合の日。　松田の別宅。
奥の部屋から笑い声。雑誌を読んでいる夕子。柴崎が現れる

夕子　お相手は終わったの？
柴崎　ああ。このカフスボタンを渡してくれと頼まれた。
夕子　松田に？

柴崎　一世一代の日だからね。ご主人の晴れの舞台の正装は、自分も用意したいって言う女心だな。

夕子　でも、ここに寄ってから行くんじゃない？松田は。

柴崎　ありえるな。（と、夕子の雑誌をのぞき）…問われる貞操観念…。日本中、その話題だな。

夕子　他人事みたいに言って。女の肩に手を回してる男は、あんたでしょ？

柴崎　（笑っている）

夕子　昨日は、奥の君がね『この女性は許せない。お国のために命を懸けて戦った旦那の帰りも待てないだなんて、破廉恥な。ああいうおとなしそうな女に限って、色キチガイだったりするのよ。』って。

柴崎　そういう奥の君は二号だがな。（笑う）君は、どう思うんだよ

夕子　イメージがいい人ってのは、案外大変ね。応援してきた人から、裏切られたって相当叩かれるでしょうねえ。

柴崎　ああ。

夕子　あの人馬鹿みたいに真面目でしょ？そんな人が、男にだらしがないだなんて一番反感買うわよ。女が女に厳しいのかしらね。素子さんは日本中の女を敵に回したけど、あんたはちっとも責められないじゃないの。あんたみたいなのは、ちょっとでもいいことしたら、思ってたよりいい方ねぇ。って世の中をあっという間にだませるのよ。

犬の嬉しそうな声。

柴崎　松田か？

夕子　違うわよ。嬉しそうじゃないの、ボギー

柴崎　そうか？

夕子　ボギーは、あなたには吠えないわね

柴崎　吠えない。でも、撫でさせてもくれない。

夕子　（笑って）一番人を見る目があるのは、ボギーかもね。

ベルが鳴り、夕子が出ていく。柴崎は雑誌を見つつ、タバコを吸う。「お待ちください！」と夕子の声。修が現れる。

柴崎　…！

修　「夫婦の生活」の記者、安田修です。

修は名刺を渡し、柴崎は黙って受け取る。

修　久しぶりだな。元気だったか？
柴崎　ええ。
修　今日はね、取材に来ました。君と一杯やって、一発殴ってもみたいところだがね。
柴崎　君、コーヒーを。
夕子　はい。

夕子は、奥へ。

修　なぜここに自分がいることが分かったんだろう。と、君の顔に書いてあるが、正解かい？
柴崎　（少し笑う）そうですね。
修　元は、君と同じぶんやだ。このくらいは、ね。…松田家本宅は純和風。別宅は、洋風、と。羨ましい限りですな。

間

柴崎　すっかりご無沙汰してしまって…
修　年賀状くらいよこせよ。知らん仲じゃなし。
柴崎　…そうですね。

間

修　あれは、松田の指示か？
柴崎　…
修　「スター百一夜」に素子が呼ばれたときに、何かあるとは思ってたんだ。まさかこういう展開だとはね。
柴崎　助言もしたんですよ。素子に。知ってても言ってはならんことがあるから気をつけろと。
修　素子がそれを聞かなかったってことだな。
柴崎　日本は7年前、独立しました。独立しましたが…
修　同じくして安全保障条約が結ばれた。アメリカはいつでも日本に「望むだけの兵力を望む場所に望む期間だけ駐留させる権利」を持っている。
柴崎　ええその通りです。今も反対運動が起こっていますが…。自分に言わせれば、これからも日本はアメリカには逆らうことなどできません。アメリカがこさえた柵の中でアメリカからもたらされた自由を満喫するしか道はない。

修　素子はその柵を蹴破る発言をした。その罰が、この捏造スキャンダルか。
柴崎　（笑って）さすが、元毎朝新聞記者ですね。
修　…昔のことだ。今はいいぞ。制約なく自由に書ける。

修は、柴崎の前に写真を並べる。

修　いい写真だろ？仲睦まじい老夫婦と言ったところだな。
柴崎　これは…
修　坂の途中に能楽堂があるだろ？屋根の上に登って撮った。お妾さんの中庭は、あそこの屋根からよく見えるぞ。
柴崎　…
修　こっちは、松田がここに帰ってきたところ。堂々と歩いてくるから、かえって疑われなかったんだな。次号の「主婦と生活」は、完売間違いなしだ。
柴崎　…
修　君は、松田の手となり足となり、日本新聞、新日本テレビの№2に昇りつめた。それは自由だ。君の人生だ。
柴崎　…何が望みですか？
修　…
柴崎　お望みの額を出します。修さんにふさわしい席を、わが社に用意することも…
修　馬鹿にするな！！
柴崎　…
修　君はいつから、…金だけで物を判断するようになったんだ？
柴崎　…アメリカで交渉をしてきました。アメリカでは、自分を演出しないとダメなんです。自分は普通の日本人とは違う。金も地位もある特別な日本人なんだと。
修　君も差別を？
柴崎　そりゃありますよ。「Hey,jap」「yellow monkey」は歩いてるだけで、何度も耳に入ってきます。敗戦国ですからね。それにアメリカではやはりパールハーバーの恨みがあります。日本で英雄視されていた特高飛行隊は、アメリカじゃキチガイ扱いですよ。日本が貶められないためには、日本が日本であるための地位を守るには、どうすればいいのか。
修　自分より下のものを作り出す。
柴崎　そうです。人類は平等だなんだと主張したところで、白人にとっては有色人種のたわごとに過ぎない。平等だと主張すればするほど、日本を貶めることになる。
修　しかし…
柴崎　日本でだって結局は同じことです。どれだけの金が、権力がバックにあるか。交渉するうえでのカードですよ。

修　…
柴崎　松田なんか、自分が昇り詰めるためにはなんだって利用しますよ。滋も…素子も。俺も。…天皇陛下も。
修　君は、どうして松田の下で働いてるんだ…？
柴崎　どうしてでしょうね。理想で世界は変えられない。それをあの人は、体の芯から分かってる。そうだとしたら、何をするんだろう。気になってしょうがないと言ったところでしょうか。

間

修　素子と滋君と君と…。三人で通学してただろう？あの坂、急だな。登っている途中で休んでしまった…年かなあ…。
柴崎　僕ももう、軽々とは登れませんよ。
修　そうか。（少し笑う）

間

修　君たちが何を見てるのか、何に向かって歩いていくのか、俺は楽しみだった。
柴崎　…
修　滋君は戦争で夢を絶たれた。素子は、何かを取り戻そうとしてるように見える。君は…何がしたいんだ？君が登る坂の上にはいったい何があるんだ？
柴崎　素子は…何か言ってましたか？
修　いや。何も。何も言わないときが、あいつは一番怖いんだ。（と、笑う）
柴崎　…俺は…
修　謝ってほしい。俺にじゃなく、素子にね。
柴崎　取引ですか？それにしては…
修　そうだな。俺にメリットはない。だからかな、いつまでたっても貧乏暇なしだ。

夕子が二人にコーヒーを持ってくる

修　いい匂いだね。アッサムかい？
夕子　コロンビアですわ。（笑って小声で）アッサムは、紅茶の名前でしてよ。
修　お。間違えた。たまにかっこつけようと思っても失敗するな。（時計を見て）そろそろ失礼するよ。じゃ。

修は出ていき、夕子は送っていく。柴崎は、修が置いていった写真を手に取り、握りつ

ぶす。
間。
夕子。

夕子　あんたのどこがいいのかしらね。
柴崎　え？
夕子　だってあの人、あんたのこと好きだもの。
柴崎　そうか？
夕子　鈍感よね。そういうところ。
柴崎　そうかな。

間

夕子　私、結婚するわ。
柴崎　なんだよ突然。
夕子　本気にしてないでしょ？本気よ、私。夕子・ジェファーソンになるの。
柴崎　あいつと？（笑って）君は、英語はからっきしだろう？
夕子　私の話、きちんと聞いたことはある？
柴崎　聞いてるだろう？
夕子　ごまかさないで。あんたは、聞き流してるだけよ。私がどういう気持ちでいるかなんて気にしたことないでしょ？彼はね。ずっと私の目を見るの。私が今、どんな気持ちでいるか、全身で感じようとしてくれる。
柴崎　それはそれは。
夕子　ま、限界はあるわよ。でも彼が今や、日本語がペラペラなの。愛の力は偉大ね。

間

柴崎は夕子を抱きしめる。そのままにされている夕子。

柴崎　迷惑はかけないよ。このまま続けてくれればいいんだ

夕子、柴崎をビンタする。間。

夕子　あなたのことは好きだった。でも、あなたを切るわ。彼のためにね。

犬の吠える声。「やめなさい。」と松田の声。燕尾服を着た松田が来る。

松田　どうだ？
夕子　まあ！お似合いですわ。フレッドアステアみたい。
松田　そうかね？（まんざらでもない）
柴崎　いよいよですね。陛下にご覧いただける今日、もはやプロ野球は国技だと言ってもいいんじゃありませんか？
松田　（笑って）陛下はナイターをご所望だからね。今までにない万全の警備態勢だ。苦労をしたよ。
夕子　まあ。大変でしたのね。でもなぜ、ナイターを？
松田　皇居内の御文庫から水道橋方面の空が明るく光っていることを陛下は気にされていたようなんだ。
夕子　後楽園球場の明かり？
松田　そう！そうなんだよ。
柴崎　宮内庁長官は、未だに今日陛下がご覧になるのはナイターではない。デーゲームだって言い張ってるらしいですよ。
松田　あの男は、きっと死ぬまで言い張るぞ。
夕子　まあ。（笑う）
柴崎　貴賓室までの床も階段もピカピカに磨き上げさせました。昨日のリハーサルじゃ、侍従から滑りすぎて危ないって注意が出たくらいですよ。
松田　陛下と皇后がご覧になる後ろでね、同じ貴賓室で、私も試合を見るんだ。
夕子　まあ！陛下と同じお部屋で。
松田　ああ。私はプロ野球の父とも呼ばれているからね。是非にということなんだ。
夕子　素晴らしいですわ。今日は、永嶋選手は出ますの？
松田　どこもかしこも永嶋ファンばかりだな。
夕子　ええ。大スターですもの。
松田　先頭打者で出るよ。
夕子　まあああ！楽しみ。
松田　打つんじゃないかな。永嶋は、大一番に強いからね。やってくれそうな気がするよ。
夕子　ええ。私もそう思いますわ。
松田　よし。ちょっと…。

松田は奥の部屋へ

夕子　そんなに松田に尽くさないといけないの？友達を裏切ってまで。

夕子は松田と反対のほうへ。

松田　　柴崎！柴崎！

少し間。柴崎は、松田のほうへ。

9-2場　　安田家

ほぼ同じ時刻。何通もの手紙を開け、読んでいる夏子。素子への非難の手紙らしい。

夏子　　なにこれ。怖いなあ。赤い字で書いてくるってわざとだよね。「…あなたは、私ども婦女子の地位を貶めた…」「死ね」って素子おばさんは、お前に迷惑かけたかって話だよ。

玄関の扉があく音

素子　　ただいま。

夏子　　お。おかえりなさいっ。

夏子は、慌てて手紙を隠そうとするが無駄に終わる

素子　　いいわよ。隠さなくっても。私への抗議文でしょ？

夏子　　…なにそれ？

素子は、たくさんの手紙の入ったカバンを持っている

素子　　学校に届いた抗議の手紙。すごい量よね。肩凝っちゃった。

夏子　　学校…大丈夫だった？私、明日から学校まで送っていくよ。変な人がいたら、私が守るし。

素子　　大丈夫よ。学校はね…しばらく自宅謹慎しなさいって。騒ぎが落ち着くまでね。生徒も動揺してるし。

夏子　　そっか。

素子　　ええ。

夏子　　買い物もさ、私が行くよ。

素子　　そうね。ありがとう。

間

夏子　しかしさ。素子おばさんの勤め先も調べたりさ、うちの住所だってどうやって調べたのかね？暇なんだな、この人らは。

素子　…

夏子　明日から何する？久しぶりに好きなことしたらいいよ。いつも忙しかったじゃん。あ！素子おばさんの部屋があったらよかったよね。読書ったって、この家、行き場所ないもんね。何読む？明日、図書館で借りてきてあげるよ。

素子　そうね。何がいいかな。

素子、そう言いながら、大量の手紙を見つめる

夏子　でもさ。こういう手紙、差出人の名前がないって言うのが姑息だよね。文句言いたいなら正々堂々と言ってこいって思うけど…あれ？

一通だけ、差出人の名前があったらしい。

夏子　…藤本滋。

素子　！

夏子が、素子に手紙を渡す。素子が封を開ける。別空間（車の中）に、柴崎が浮かび、同じく手紙の封を開ける。修が駆け込んでくる。

修　滋君が…。藤本滋と思われる溺死体が、博多港で見つかったそうだ。

９－３場

後楽園球場

松田が直立不動でいる姿が浮かび上がる。「間もなく陛下の到着です」と声が聞こえる。

９－４場　９－２の続き

滋の姿が浮かぶ。

滋　俺はもう投げられない。素子も見に来てくれた５年前の試合で、それが分かったんだ。

素子　…自分で？

修　☆（うなずく）

滋　☆終わらせたほうがいい。そう思った…。なのに、出ていけなかった。ロッカールームから。期待に満ちた４万人の目が失望に変わった…その瞬間を思い出す

と…。マウンドを降りてベンチに戻るとき、妻が目に入った。俺はすぐに目をそらした。何も見られなくなっていた…。

修　戦争に行かなければ肩も、壊すことはなかったかもしれない。しかし、滋君が投げられなくなったのは…

滋　上官から、「おまえは肩がいい。ここではこれを投げろ。お国のためだ。皇国の威光を知らしめるんだ」と、手榴弾を渡された。家族を守るためと、投げた手榴弾は、何人もの中国人を吹き飛ばした。自分たちは、金目のものを敵の死体から探すため、重なり合った死体を仰向けにしてポケットを探った。吹き飛ばされた兵隊の一人は、まだ幼さも残っている青年だった。彼の左の胸ポケットからは、笑顔の母親の写真が出てきた。…家族を守るためと戦ってきたが、自分は、あの青年の母親から家族を奪ったのだと…。それでも、戦い続けなければならなかった。「戦争が終わるまで」は。誰が終わらせることができるのか、いつ終わるのか、わからないまま、自分は何人殺したのかわからなくなったころ、８月１５日を迎えた。

夏子　才能ある選手が、どうして最前線へ行ったの？松田さんの力で、なんとかできたんじゃないの？

修　学歴の低いものから最前線に送られた。それは、軍の決まりだったからね。滋君は、戦地でも英雄だった。「白球を手榴弾に持ち替えて。壮烈なる雄姿」ってね、日本新聞は…いやどこの新聞も書き立てたもんさ。

夏子　お父さんもってこと？

修　そうだ。滋君が戦地に行くことを止めることはできない。だとしたら、彼を英雄にするしかないってさ。良かれと思って書いた。滋君のお母さんも記事を読んで喜んでくださったしね。でも、本当はどう思われていたのか…、考えることをやめてしまったんだな。…敗戦後、滋君は、シベリアに抑留された。

滋　収容所がどこだったのかもわからなかった。ただ汽車に詰め込まれ運ばれた。朝から日が暮れるまで、ただひたすら木を切り出し運んだ。あれはきっと、シベリア鉄道の線路に使われたんだろう。一日に与えられる食料は、朝は黒パン一切れと底の見えるスープが一杯。昼は、ジャガイモ一つ。夜も黒パン一切れとキャベツが少しだけ浮いているスープが一杯。朝食が終わるとすぐに、ライフルを持ったロシア兵と猟犬に見張られながら、森の奥へと隊列を組み進んで行く。体力を失った者は、倒れた。倒れた者がいると、まず靴を見る。自分よりましな靴だったら、履き替えた。何もない真っ白な雪道を見つめながらも、常に食い物のことを考えた。ある日、雪道にソ連兵が食べ残した鮭の空き缶が落ちていた。その空き缶を奪い合って殴り合いのけんかが始まった。ほんのわずかに、空き缶のふちに残っている鮭のカスを奪い合ってだ。何もかも凍り付く寒さだ。自分の吐く息で、睫毛が凍った。寒さと飢えで、次々に死んでいった。死んだところで、埋葬

もしてもらえない。素っ裸にされ、リヤカーに山積みにされる。死体の山をみても何も感じなくなっていった。一週間に一度、死体の山が積まれたリヤカーを押し、山の中に棄てた。素っ裸の死体は、氷のように固くなって、棄てるときには、生きていたものとは思えない固い音がした。そんな中、俺のファンだという少年に会った。まだ１８歳で名前を浩二といった。寒くて眠れない日には、浩二と語り合った。疲れ切っているはずなのに、野球の話をすると止まらない。浩二は頬を染め、毛布をかぶったまま話し続けた。彼はピッチャーで、俺のフォームを真似していたと話してくれた。浩二は、「ピッチャーは握力が命」だと言って、こっそり持ってきたボロボロの野球の球を、ポケットの中で握ってトレーニングしていた。朝、作業に向かうときも、疲れ切って収容所に戻るときも。「春になって雪が溶けたら、キャッチボールしよう」そう言ったら、浩二は嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑った。浩二を見ていたら、きっと帰れる。いつか日本に帰れるんだ。そう思うようになった。

柴崎　藤本滋は日本が誇る野球選手だ。彼をどうか、日本へ返してもらいたい。俺は…

滋　あいつに帰ってきてほしかった。ただ生きて帰ってきてほしかった。長いシベリアの冬が終わろうとしている頃だった。収容所までの長い雪道を、疲れた足を引きずるように帰っているときだった。見張りの犬がけたたましく吠えた。また誰かが倒れた。そう思って通り過ぎようとしたら、倒れたのは、浩二だった。俺は駆け寄った。このまま倒れていたら、確実に凍死してしまう。「眠るな、浩二。俺の肩に捕まれ」そう言ったが、あいつはもう起き上がる体力が残っていない。「もうすぐだ。もうすぐ雪も溶ける。キャッチボール、するんだろ？」浩二は、目を開けた。「浩二！日本に帰るんだ。一緒に日本に帰って野球をやるんだ！」浩二は、あのぼろぼろの野球の球を俺に差し出した。「こいつを持って、日本に帰ってください。日本でこの球、投げてください。…滋さんと野球、やりたかった…」そう言って、あいつは…死んだ。

柴崎　滋がどこの収容所にいるのかも、まだ生きているのかすらわからない。松田に…頭を下げた。松田は、旧日本軍とのパイプを太く持っている。滋は…生きていた。

滋　１９５２年も終わろうとする頃。突然、俺一人呼び出され、帰国を命じられた。「一緒に帰ろう。日本へ一緒に帰るまで頑張るんだ」そう誓い合っていた仲間を、俺は置き去りにした。

柴崎　滋は…生き残った。それなのに…！！

滋　野球ができる。日本へ帰れたら、また、野球ができる。そう思った。日本はアメリカに負けたのだと聞いた。けれど、日本が負けたということより野球を堂々とできることがうれしかった。だが白球を握り、投げようとすると、あの中国人の青年の顔が浮かぶ。彼の母親の笑顔が浮かぶ。

修　奥さんは、家を出ていった理由を何も聞いていないそうだ。ただ、「君のせいじ

やない。君と家族になれたことは、俺にとって一番の幸せだった。」とメモが残されていたそうだ。

滋　戦争は…終わらないんだ。俺の中では…

柴崎　あのまま、収容所で犬死したほうがましだったというのか！！

滋　俺は…人を殺した。仲間を裏切って、自分だけ帰国した。

柴崎　お前は特別だ。日本にとってかけがえのない野球選手なんだ。

滋　特別だから、許されるのか？俺は…人として、許されないことをした。その事実は消せない。

柴崎　時代だ。時代がそうさせた。お前だけが悪いんじゃない！

滋　投げられないんだ。どうしても。俺は…、野球しかしてこなかった。他は何もできないんだ。怖くなって…酒を飲んだ。酒を飲んで…、妻を殴ったこともある。妻のせいじゃない。あいつは本当によくしてくれている。分かってるのに…。ダメなんだ。どうしても…だめなんだ。

柴崎　お前がいたから、頑張ってきたんだ。お前が松田の下でスターになって、俺は、お前に追いつきたくて…。お前がいなくなったら…どうすりゃいいんだ…。

滋の前にボールが転がってくる。滋はボールを持ち、キャッチャーのサインにうなずく。一筋の明かりが滋を照らす。

柴崎　生まれてくる時代を間違った。時代さえ違えば…、あのマウンドに立ち続けるべき男は…。滋、お前なんだ。

滋、大きく振りかぶる。大歓声が聞こえ明かりが変わっていく

9－5場　後楽園球場

松田の姿。大きな大きな拍手の音。明かりがさす。天皇陛下を貴賓室に迎えるところらしい。松田は最敬礼。万歳の声も聞こえてくる。大きく「君が代」斉唱が始まる。国家が大音量になっていき、松田の誇らしげな表情を残しカットアウト。

「サヨナラ。サヨナラホームラン！9回裏。永嶋選手のサヨナラホームラン！」の中継が聞こえ、別空間に滋の姿が浮かぶ

滋　戦時中、キチガイ扱いされた野球を夢中でやって…、そして今、テレビに永嶋と言う選手がいる。この一人の男の夢をかなえるために、何千何万と野球を目指した若者の夢が消えていくような…そんな気がしたんです。…「こんなに虚しく命を捨てずにどうかこの次には、誠にみんなの幸いのために、私の身体をお使いく

ださい」…

大歓声が聞こえてくる

エピローグ

修が「星めぐりの歌」を歌いながら現れる

修　…♪こぐまのひたいのうえは　星のめぐりのめあて…。昭和４３年。天覧試合からは９年経ちました。東京オリンピックもありましたからね。松田の思惑通り、人々は難しいことはすっかり忘れ、過去を振り返ることなどなくなって来たかのように…。…小熊の額の上は、北極星。大昔の船乗りが、大海原で迷うことのないように道しるべにした星と言われています。…生きていくための星…なんでしょうかね。

１９６８年３月１２日　本郷　坂の上　グラウンドが見えるところ　放課後

喪服の柴崎が現れると、野球の球が転がってくる。球を拾い、辺りを見回しているとユニフォームを着た麦が走ってくる

麦　すみませーん。

柴崎　…

麦　あの。ボール…

柴崎　野球部か？

麦　はい。

柴崎　女子校なのに、野球部があるのか？

麦　作ったんです。だからまだ部員が足りなくて、試合ができないんです。

柴崎　ポジションは？

麦　ピッチャー。

柴崎　…君が？

麦　悪いですか？

柴崎　いや。ずいぶん…

麦　チビですよね。いいです。はっきり言ってくれても。お父さんに似ればよかったんだけど…

柴崎　野球、好きか？

麦　はい！

グラウンドから女子高生の声「先生！不審者がいます！！」

麦が柴崎を見る

柴崎　俺か？
麦　そうじゃないですか？

「見学の許可は取られていますか？」と声がする

柴崎　え？えっと…

素子が来る

柴崎　☆あ…
麦　☆あ！！
素子　え？
麦　素子先生に見せるの、忘れてた！
素子　なに？
麦　昨日も忘れて持って帰っちゃったから。今日は！
素子　明日でいいわよ。
麦　でも、お母さんと約束したし。

麦、走っていく

素子　久しぶりね。
柴崎　ああ。
素子　ご葬儀？…松田さん？
柴崎　いや。あの人は不死身だよ。今日のは、あの人の弟の葬儀だ。

二人は、グラウンドを見ながら話していく。

柴崎　野球部の顧問か？
素子　そうよ。一緒に練習だってするわよ。
柴崎　素子が？まともに投げられるのか？ボール。
素子　だって部員が少ないんだもの。
柴崎　見るからに弱そうだな。
素子　分からないわよ。頑張ってるもの、あの子たち。
柴崎　…変わらないんだな。
素子　生徒たちと比べたらね。中一が高三になっていく6年間は、すごいわよ。本当に

変わっていく。…柴崎君は？相変わらず忙しいの？

柴崎　毎日違う人間と会って、いくつもの案件を取り扱って…、変化に富んだ毎日のようだが、実際どうなんだろうな。

麦が戻ってくる

麦　素子先生。これ。

素子　新聞？

麦　素子先生の家、毎朝新聞じゃないでしょ？

素子　ええ。東西新聞。

柴崎　日本新聞とれよ。

素子　読むところがないもの。

柴崎　お前なあ。

麦　これこれ。

素子　（見る。が、間）…読んでもらえる？

柴崎　老眼か？

素子　うるさいわね。なら読んでよ。

柴崎　（間）…君、読んでくれ。

麦　いいですけど。…「東京湾にあるゴミ捨て場。夢の島に棄てられた一艘の船がある。白一色に塗りつぶされ、名前も変えられているが、それは私達が忘れてはならない船。今から１４年前の３月１日のビキニ環礁。そこで何が起きたか。この船と共に思い出そう。忘れてはならないことを、この船は語る。この船、第五福竜丸をこのまま東京湾に沈めてしまってよいものだろうか。（５５歳。記者。安田修）

素子　兄さんだ。

麦　やっぱり！お母さんが、これ、多分素子先生のお兄さんの投書よって。

素子　…一度お会いしただけなのに。

麦　先生のお兄さんは、何度か家に取材に来たんだって。

素子　そうなの？

麦　そのたびに、大量の粉ミルクを持ってきてくれたからありがたかったのよ。って言ってた。

生徒のアナウンス「最終下校時刻１５分前となりました。片付けの終わっていない部は、速やかに片付け、下校の準備をしてください」

麦　うわ。片付け行ってきます！

麦、走っていく

柴崎　修さんらしいな。自分の雑誌に書きゃいいのに、わざわざ新聞の投書に。
素子　そうね。
柴崎　文体も変わらないな。いつだって直球だ。
素子　なに？同じ記者同士のダメ出し？
柴崎　いや。…動くんじゃないか？世論が。
素子　まさか。こんな小さな投書よ。
柴崎　君もしぶとく続けてるんだろ？署名活動。
素子　今日もあの子たちと一緒に、坂の下に立つわ
柴崎　はじめてきたよ。隣の松田の別宅にはしょっちゅう来てたのにな。
素子　よく見えるでしょ？後楽園球場。
柴崎　ああ。
素子　…何かあったの？
柴崎　いや。

間。生徒たちの声

柴崎　松田は今でも社までひとりで電車で来てるんだ。しかも出社がバカみたいに早い。社長より遅く来るわけにはいかないって言うんで、日本新聞の記者たちはほぼ全員目の下に隈を作ってる。松田一人が、つやつやピカピカしてるよ。
素子　どこも似たり寄ったりね。
柴崎　ただ、後継者の話をし始めた。長男に新日本テレビを継がせ、次男に日本新聞を継がせようとしている。
素子　そう。
柴崎　ダメになるぜ。絶対ダメになる。長男も次男も典型的な二世のお坊ちゃんだ。あんな世間知らずが社を回せるわけがない。松田は、社をつぶす気なのか、耄碌してるとしか思えないよ。

間

素子　私には子供がいないからわからないけど…。自分が死んだ後に何を誰に残したいかを考える時はやってくるんでしょうね…。
柴崎　こんな話をするようになるとはね。年取ったな、俺たちも。
素子　そうね。…もう一生会わないだろうって思ってた。

柴崎　…ああ。

「お疲れ様でした！」という女子高生たちの声。「素子先生！！」と麦の声が聞こえ、走ってくる。

麦　ちょっとだけ、投げていっていいですか？

素子　いいわよ。でも、５分ね。いい？

麦　はい！！

麦は走っていく。

素子　今の子、藤本麦っていうの。…滋君のお子さんよ。

柴崎　…

素子　あの子、手が小さいのよ。でも、ピッチャーになるには、球をしっかりつかまないといけないからっていってね。授業中も球を握りしめてるのよ。

柴崎　…そうか。

素子　一生懸命、何かをつかもうとするみたいにね。

柴崎　…

素子　あ。投げるわよ。

麦、投げたらしい。

柴崎　…へたくそだな

素子　（笑う）

柴崎　よし！藤本麦！こっちに来い！球を受けてやる！

麦　素子先生！知らないおっさんと練習してもいいんですか？

柴崎　知らないおっさんとは何だ！さっきお喋りしただろう？

麦　じゃあ、自己紹介してくださいよ！

柴崎　柴崎敏之。４８歳。…素子先生の友達だ！！

麦　え？そうなの？

柴崎　ミット持ってこい。ミット。

麦　素子先生。この人、偉そうなんですけど。

そう言いながら、ミットを柴崎に渡す。

柴崎　よーっし。俺が実況してやるから、本気で投げてみろ。

麦　なんですか？実況って？

柴崎　晴れ渡る空の下、大観衆が訪れている後楽園球場です。今日の日本レンジャーズ。先発は藤本麦投手です。小柄ながら、まっすぐな伸びのあるストレートが武器のピッチャーです。さあ、藤本麦。マウンドに上がりました。

麦は、笑いながら柴崎の実況に従って動く

柴崎　藤本投手。大きく振りかぶって…投げました！！

後楽園球場からの歓声が風に乗って聞こえてくる。麦の笑い声。

夕焼けが濃くなっている。

幕。